
風光の真竜

黒焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風光の真竜

【Nコード】

N53860

【作者名】

黒焔

【あらすじ】

少年は竜に出会い、竜と共に生きていく。
彼らは偉業を成し遂げ、後世に伝説として語り継がれていくのだった。

この物語は彼らの歩んだ道である。

このたび完結致しました。

プロローグ 出会い

モンスターと呼ばれる生き物が普通に住み着く世界。

そんな世界で一人の銀髪の少年が町外れの森の中を歩いていた。

森の中には野生のモンスターがいる。

そのことは少年も知っているはずではあったが、彼はそれでも森の中を歩き進んでいた。

彼自身、何で森に入ったのかは説明できない。

ただ何かに呼ばれたような気がしたのである。

森も呼ばれたせいなのか生物がいないかのように静かだ。

しばらくすると開けた場所に出た。

その中心には光を放つ玉のようなものがあつた。

少年が近づくとそれは時折震えており、卵であることが解る。

少年は何気なくその卵に触れた。

すると少年が触れた部分からひびが入り、そのひびは徐々に広がっていく。

そしてそのひびが卵全体に広がったその時、真つ二つに割れて中のものがその姿を現す。

「君は………?」

それは白き子竜だった。

その子竜は少年の言葉に反応してその目を合わせる。

「……キユイ?」

それが伝説の始まりだった。

白き竜バハム

あの時森の中で少年シヨウの前に白き子竜が現れてから3年が過ぎた。

シヨウは12歳となりハンターになっていた。

ハンターとはモンスターとともに過ごしコロシウムで戦わせ、その賞金で生活する人のことである。

シヨウはあの時の白き子竜バハムとともにすごしていたが、バハムはあの頃のまま姿は変わらなかった。

「なんでバハムは大きくならないんだろ？」

「キユイ？」

シヨウはため息をつく。

普通竜は3年も経てば体は大きくなり、翼を持つものなら飛べるようになるのだが、バハムは小さいままでそうはならなかった。

「他の人に聞こうにもなあ……」

竜はこの世界で希少である。

大きな都市でも2匹以上竜を所持している都市は少なく、1匹もないことのほうが多い。

シヨウはこの街で唯一竜を使うハンターだった。

竜は大人でも扱うことが難しいのだが、シヨウだけには気を許しているようなのでシヨウが共に過ごすことになった。

「もう少しで試合だったのに……」

あと2週間で近くのコロシウムで初試合ということになっていた。

このままじゃ辞退するしかないかな……」

今のままでは試合どころではないのは一目瞭然だった。

シヨウが試合出場を悩んでいる頃。

シヨウの住む街から遠く離れた1つの都市が壊滅していた。

黒き巨大な竜1匹の力で。

周囲には竜の咆哮が木霊していた。

大会の影に……

「広いな」

「キュイツ」

シヨウとバハムは大会が行われる街『ゴルドルク』に来ていた。試合は辞退することにしたが、試合の雰囲気は感じておいたほうが良いと来ていた。

今日はコロシウムで大会がある。

シヨウとバハムはコロシウムへ向かっていった。

ゴルドルク郊外では密談が始まっていた。

「……準備はできているな？」

「はい……あとは出撃するだけです」

「……よし、大会決勝になったら出撃だ。ほとんどのモンスターが疲れてまともに戦えないからな………」

もうすぐ決勝が始まる……。

「ゴルドルク大会決勝戦！！ 優勝するのはどちらか！！ 前大会優勝者カイル&デュークVS初出場アッシュ&ドライブ！！」

司会の声がコロシウム中に響いた。

デュークは黄色の雷属性の重量系竜人。

ドライブは角の生えた馬ユニコーンである。

「決勝戦…… 試合開始！！」

街の郊外では出撃が近づいていた……。

「よし、始まったな……」

「そのようですね……」

「……行くぞ」

決勝戦は白熱した試合になっていた。

デュークが強烈な電撃を放つとドライブが持ち前のスピードでかわし、突撃する。

ドライブのほうが有利に見えるが、デュークの防御力は高くドライブの攻撃はあまり効果がない。

さらにデュークの一撃は一撃で戦闘不能になるほどの威力なので油断できない。

「ガッ!!?」

デュークの電撃がドライブに決まった。

まだ戦闘不能とまではいかなかったが、ドライブの脚が完全に止まる。

デュークが最後の一撃を決めようとした……そのときだった。大きな音が響き、コロシウム全体が揺れた。

「なんだ……?」

コロシムにいたるもの全員がざわめく。

しばらくすると地響きが鳴り、モンスターの大群が現れた。

「おらおらー！！ ガイズ盗賊団の到着だー！！ ここにいるモンスターは貰っていくぜー！！」

側近らしい人物が叫んだ。

だがボスらしいガイズと言う人物は見当たらない。

「そんなことさせるか！！ デューク！！」
「グアツー！！！！」

デュークが電撃発動の体勢に入る。

しかしそのデュークに、上空から火球が直撃した。

上空には赤い火竜ダイルに乗ったガイズがいた。

直撃を受けたデュークはギリギリで攻撃体勢を保っていたが、体制が整わない。

ダイルが第二撃を放った。

今度は準備ができていたデュークはその攻撃を弾いた。
だが……。

「危ないー！！」

「えっ？」

火球はシヨウとバハムのほうに進路を変えていた。

「うわー！！」

デュークは第二撃のあとのダイルの攻撃にやられていた。

火球がシヨウの目前にくる。

シヨウが死を覚悟したその時だった。

「キューー!!」

バハムが吠え、身体から光を放った。

光が消えた後、火球も消えていた。

バハムがいた場所には白い蛇型の成竜がいた。

「バ……ハム……？」

「ギイツ……」

成竜はシヨウの疑問に頷いて答えたのだった。

大会の影に……（後書き）

バハム（成竜）

白い蛇型の竜。

姿のイメージは遊戯王のレインボードラゴン。

デューク

雷の重量系竜人。

カイルのパートナー。

姿のイメージは遊戯王のヴィクトリードラゴン。

ダイル

赤い火の火竜。

盗賊団長ガイズのパートナー。

姿のイメージは遊戯王の創世竜ジェネシクドラゴン。

バハム覚醒

バハムの翼は天使の羽のようで、バハムの体長と同じくらいの大きさが生えていた。

「!？ いつから……ダイル!!」

ガイズの声に反応したダイルがバハムに向かって火球を放った。

しかしバハムが咆哮すると火球が消え去り、何かの衝撃でダイルがバランスを崩した。

「くっ……あれでいくぞ！ ダイル!!」

ダイルの口に炎が収束していき……。

「フレイムレーザー!!」

その炎がバハムに向かっていった。

同時にバハムが咆哮する。

空気弾が光を放ちながらダイルのフレイムレーザーを貫き、ダイルに向かっていった。

ダイルは間一髪で空気弾を避けた。

「グルルルルッ……」

「ダイル？ どうした？」

ガイズの言葉にもダイルは答えない。

ダイルは戦意を無くしていた。

たった一発のバハムの攻撃で圧倒的な力に恐れをなしたのだ。

「ダイル!! …… チツ引き上げるぞ!!」

ガイズの声と共に盗賊団はコロシウムから引いていった。

バハムが光を放つ。

その光が消えた後バハムは元の小さな姿に戻っていた。

「バハム!!」

「キュイツ」

シヨウはバハムを抱きしめた。

「助かったぜ小僧」

シヨウが振り返ると決勝戦の一人、カイルが立っていた。

「俺はカイル…… ってもう知ってるか。お前の名前は？」

「シヨウです。こっちはバハム」

「シヨウにバハムか。次は対戦相手として会おうぜ」

「はいっ!!」

カイルとデュークはコロシウムから出ていった。

「僕たちも行こう。バハム」
「キュイツ」

シヨウとバハムもコロシウムから出た。

シヨウ達がコロシウムを出る直前……

上空を黒い影が通った……

巨大な竜の形をしていた……

バハム覚醒（後書き）

前話に組み込んでも良かったかな……？

黒き竜ブレイズ

ゴールドルクでの大会から二ヶ月が過ぎた。

その後行われた別の都市での大会で、見事優勝したシヨウとバハムは街に帰る途中だった。

宿命の相手に出会うことになるのは……。

「バハムすごかったね」

「キュイツ」

バハムは戦闘態勢にはいるとゴールドルク大会でのあの姿になっていた。

戦闘を行うごとに通常時でも成長するようで、今では通常時でも成竜と呼べるほどに成長している。

そんなのんびりとしている最中、何かの咆哮が響いた。

「な、なに？」

シヨウが戸惑っていると、上空から咆哮の主、黒い竜が現れた。

「相当驚いているようだね……」

竜の背にはシヨウと同じくらいの少年が乗っていた。

（なんだろう… この禍々しい感じは…）

竜の背に乗っていた少年を見たシヨウはそう思っていた。

「僕はオスカ。こいつは……ブレイズだ」

ブレイズという名を聞いた瞬間、バハムが戦闘体勢に入った。

「グルウウウ……」

「バハム？」

バハムは今までしたことの無い威嚇をブレイズに向けていた。

「そっちはやる気みたいだね……こっちもいかせてもらおうよ」

瞬間、ブレイズは攻撃を開始した。

黒き火球をその口から吐き出す。

バハムは白く輝く風球で相殺する。

黒と白……。

相対する色をする者の対決が始まった。

黒い火球と白い風球。

その力は拮抗していたが、相性の違いなのか多少風球が勝っていた。しかし……。

「エクステンクシヨンドークフレイム」

オスカがそういうとブレイズが黒き火球を放った。

……先ほどまでとは比べ物にならないくらい巨大な火球を。

バハムは火球のスピードが変わらなかったため避けきれず、被弾してしまった。

「ゲガア!!」

「バハム!!」

体制を崩したバハムにシヨウが駆け寄る。

「これで終わりだ……ダークシャドウイリユージョン」

瞬間ブレイズが闇に包まれたかと思うと周囲にブレイズの姿をした影が現れる。

それも数え切れないほどの数が出現した。

「こいつらはブレイズの影だが攻撃は本物だ。これだけの数でさっきの技をつかったらどうなると思う?」

オスカはそう言って笑う。

シヨウの体が震える。

これだけの数だ。

確実に……死ぬ。

「……いけ」

死の宣告が唱えられた。

ブレイズの影が一斉にエクステンクションドークフレイムを放った。
その光景は流星群が一箇所に落ちているかのようなだった。
その中心にはバハムとショウ。
死んだとオス力は思った。

「グオオオオオ！！」

バハムの咆哮と共にバハムとショウを包み込む光の壁が現れた。
突然現れたその光の壁はすべての黒き炎を防ぎきった。

「…………助かった？」

ショウは目の前の光景に呆然としていた。
しかし…………。

「バハム！？！」

バハムが力尽きて、空から落ちてきた。

シヨウはそれを見るとすぐにバハムへと近づいた。

「あれを防ぎきるとはね……」

切り札とも呼べるその攻撃に耐え切った事実には驚いていたオスカは、ブレイズの背に乗る。

「今回は見逃してあげるよ。ただ次は覚悟しておくんだね……」

オスカはそう言った。

その後シヨウには別の声が聞こえた。

「まだまだだなブラスト……」

そこまで聞こえた後ブレイズは飛び立った。

シヨウは先ほどの声が誰のものかわからなかった。

しかし次に聞こえてきた言葉で誰だったのか知ることになる。

「ブ……レイズ……」

今聞こえてきたその声は小さなものだったが、確かにバハムが言っていた。

シヨウは状況がわからず混乱し、バハムはそのダメージから気を失うのであった。

黒き竜ブレイズ（後書き）

ブレイズ

黒い火の翼竜人。

オスカのパートナーでその力は計り知れない。
イメージは遊戯王の破壊神ガンドラ。

真実

あの黒い竜ブレイズが去って一ヶ月がたった。
ようやくバハムの傷が癒えてきた。

……いやバハムという名前なのかも定かではないのだが。
それを知るのはバハム……。

……いや、ブラストしかない。

「ねえ……バハム」

ブラストはブレイズが去る直前に言った言葉以降喋ることはしなかった。

シヨウも無理には聞こうとしなかったが……。

「バハム喋れるんでしょ？」

寝ていたブラストが微かに動いた。
それでも起きようとはしない。

「……ブラスト？」

今度は首を上げた。

「全部教えなければならぬようだな……」

そういつとバハム……ブラストは観念したように話し始めた。
この世界にいる大会にでるような生き物は獣界、もしくは幻獣界ですごくしていること。

自分は幻獣界の風の竜ということ。

ブレイズとは幻獣界で会ったということ。

ブレイズがなんらかの原因で闇の力を得てこの世界に来たこと。

ブレイズの力がこの世界のバランスを崩すこと。

そして、そのブレイズを倒すために光の力を得てこの世界に来たこと……。

「それじゃあブレイズに勝てるのはブラストだけってこと？」

「他の属性の攻撃でもダメージは与えられるが、止めを刺すのは光属性でないと……！！」

ブラストが咄嗟にシヨウを抱えてその場から下が。

その瞬間さっきまでブラストがいた場所に火球が降ってくる。

「ちっ……。外したか……」

空にはガイズとダイルがいた。

「リターンマッチだ！！ 小僧！！」

ダイルは前に戦ったよりも巨大になっていた。

「ブラスト……戦おう……」

ブラストは吠えて答えた。

こんな奴に負けるわけにはいかないとばかりに……。ダイルのリターンマッチが始まった……。

信頼の風

戦況は圧倒的。

確かに以前より能力が上がったが、それはブラストも同じこと。ダイルが敵う相手ではない。

しかし、ガイズもダイルも引くということをしなかった。

「…やっぱこのままじゃ無理か」

シヨウは『このまま』という言葉に引っかかりを覚えた。

「あれをやるぜ!!　ダイル!!」

「ゴオオオオ!!」

その咆哮とともにダイルの全身から炎が噴出した。

「あれは……まさか!？」

ダイルは炎を纏った竜……まさに文字通り炎竜となっていた。

「半月前からか……全力を出すとこんな姿になった。なんでこんなことができるようになったのかは知らないが」

ガイズがそう説明した。

「せっかく手に入ったこの力だ……この力でお前らを倒す!!」
「これがブレイズの力の影響か……」

ブラストがそう呟いた。

戦況が変わった……。

さっきまでブラストの空気弾で消え、突き抜けていた火球が強力になり、空気弾で相殺するほどになっていた。そのうち、互いの体力も少なくなっていく。

「グオオオオ!!」

突然ダイルが吠えた。

その瞬間地面の所々から火柱が噴き出し、その炎が収束していく。

「これは…… いったい……」

ガイズにもこんなことははじめてらしい。

収束した炎は形を変え、巨大な鳥の姿になった。

「これは…… 無理だな……」

ブラストは地上に降り、その攻撃に対して迎撃体制をとっていたが、ほとんど諦めていた。

炎で作られた鳥は意思を持っているかのように、ゆっくりとブラストに狙いを定め、真っ直ぐに突っ込んでくる。空気弾を放つても消える気配さえない。

「万事休す……か」

ブラストが諦めたその時……。

「ブラスト!!」

シヨウが飛び出した。

「!?! 馬鹿野郎!! お前まで死んじまうぞ!!」

「でも……ブラストがいなくなるなんて嫌なんだ!!」

シヨウは叫んだ。

自分を犠牲にしてもブラストを守りたい。

その思いが新たな力を呼ぶ。

「シヨウ……」

その時、一陣の風が吹いた。

その風がブラストとシヨウを包み込み、竜巻となって炎の鳥から守る。

「な……なんだ?」

竜巻が収束していき、光り輝く。

その光が消えた後、シヨウと姿の変わったブラストがいた。竜人に巨大な翼の生えた姿。

その特徴的な翼は片翼だけで体長と同じくらい。
さらに身体の色は光り輝く白から緑に変わっていた。

「これが風の力……。俺の元の力より強いな……」

その顔は先ほどまで諦めていた顔ではなく、自信に満ち溢れていた。

「シヨウありがとな……。これなら勝てる!!」

シヨウとブラストの間に信頼が生まれた瞬間だった。

信頼の風（後書き）

ダイル（炎竜）

ガイズのパートナーであるダイルが、ブレイズの影響で強化した姿。ブラストと違い、暴走に近い。

イメージは遊戯王のヴォルカニック・クイーン。

ブラスト（風覚醒）

ショウのパートナーであるブラストが風の力を覚醒させた姿。イメージは遊戯王のエメラルド・ドラゴン。

風の覚醒

戦況が変わった……それも圧倒的に。

ダイルの吐く火球は、先ほどとは変わりなく強力なのだが次元が違いすぎる。

ブラストはその火球を翼を振るだけで消し去っていた。

いくらダイルが火球を放つも、ブラストの翼で起こす突風にすべて消し去られている。

「どうした？ これで終わりか？」

ブラストの挑発に切れたダイルは『フレイムレーザー』を放つ。

「ふんっ」

ブラストはその『フレイムレーザー』を風球一発で消し去った上に、貫通してダイルに攻撃を与える。

「大丈夫かダイル！？」

「グゴオオオ！！」

「なっ！？」

ダイルは気遣ったガイズに向かって火球を放っていた。ブラストの風球で消し去って無事ではいたが……。

「どうやら理性までなくしまったようだな……」

パートナーであるガイズに向かって攻撃をしたダイル。その目は完全に狂気と化していた。

「こい……。その力、完全にねじ伏せてやる」

その言葉に対し怒り狂ったダイル。

その怒りから作り出された炎の鳥は、ブラストが覚醒するときに放ったものと比べ物にならないほどの大きさ。

その炎の鳥がブラストに向かっていく。

「ブラスト!!」

その大きさにショウが叫ぶ。

「大丈夫だショウ。離れている」

ブラストはそういうと空高く舞い上がった。

炎で作られた鳥はブラストを追っていく。

その炎の鳥に向かってブラストは翼を振りかぶる。

「トルネードストーム!!」

巨大な竜巻が起こり炎の鳥を巻き込んだ。

その後その竜巻は、収まることを知らないかのようにそのまま突き進んでいく。

……ダイルに向かって。

ダイルは回避行動に移ろうとするが、巨大すぎるその攻撃の前に回避は不可能。

「すべてを巻き込む竜巻の前に炎は通用しない」

炎の竜巻と化した『トルネードストーム』はダイルを巻き込んだ。

「ガアアア……」

ダイルは苦痛の叫びを最後に消えていった。

「幻獣界へいった。この世界で死んだ魂は幻獣界で姿を変える」

ブラストがそう説明する。

「ダイルが……死んだ……だと？」

ガイズが落胆した。

……遠くからガイズを呼ぶ声が聞こえてくる。

「親分」

ガイズ盗賊団の面々がやってきた。

「おめえら……」

「親分……。負けたんですか……」

子分たちが落胆して言った。

「ああ……。帰るぞ」

「はい……」

ガイズは子分たちが乗ってきた三ツ頭の犬、ケルベロスに乗って帰っていった。

「あれなら当分現れることはなさそうだね」

「ああ……。だが予想以上にブレイズの影響が強いみたいだな……」

「そう……。みたいだね。頑張ろうよブラスト」

「ああ……」

……遠くからその戦いを見ていた者がいた。

「ようやく覚醒したか……」

その言葉を残しその竜は闇に消えていった……。

海竜王タイダル

ダイルとの戦いから半年が過ぎた。
都市カムイでの大会で優勝したショウとブラストは、カムイの近くにある海に来ていた。

「風が気持ちいいね。ブラスト」
「ああ」

ブラストは幻獣界のときに近い姿のほうがいいのか、風覚醒状態になっていた。

休んでいる最中、海から気泡が浮かび上がってきた。

「？ 何かくるぞ」

そう見ている間にも気泡の量は多くなっていく。
そしてしばらくした後、水しぶきがあがり巨大なイカが現れた。

「クラークン！？　いくよブラストー!!」
「ちっ！　せつかくゆっくりしてたつてのに」

ブラストは休憩中に現れたクラークンに苛立っていた。
ブラストが戦闘に入ろうとした瞬間……クラークンに雷が落ちた。

「「!？」」

クラークンは驚いて海底に戻っていった。
シヨウは何が起きたか把握仕切れなかった。

「え……？ まさかカイルさん？」

雷ということでデュークを連想したシヨウだったが……。

「悪いが人違いだ……」

海からまた水しぶきが上がり今度は竜が出てきた。

「久しぶりだな……ブラスト」

「まさか……タイダルか？」

「ああ、ブレイズには会ったか？」

「えっ？ ブラスト知ってるの？」

シヨウが聞いた。

「ああ……幻獣界で会ったんだ。ライバルだったんだがまさかお前まで新たな属性をもってたとは……」

「対抗属性同士はさすがに辛かったけどな」

新たな属性を持つということとはかなりの努力が必要であり、ましてや対抗属性を持つのは普通より数倍も辛い努力が必要なのだ。
故に新たな属性を持つとする竜は少ない。

新たな属性を持つとうとして努力するも失敗する竜がほとんどなのだ。
ブラストとブレイズ、そしてタイダルは数少ない新属性を得た竜で

ある。

「お前がこの世界に来たのを知って雷属性を身につけて来たんだ」
「それはご苦労なことだな」

ブラストが嘲るように言った。

「まあここで久しぶりに会ったことだ。一戦勝負しないか？」
「……幻獣界以来だな。いいだろう、いくぞショウ」
「うん……」

因縁の対決が始まる……。

「こいつに手加減はできない……一氣にいくぞ!!」
「うん!!」

タイダルは海の水を操り津波を起こして攻撃してきた。

「さすが海竜王と呼ばれていただけあるな……」

ブラストが津波を風で裂きタイダルに突撃した。

「アクアイージス」

タイダルは水の盾を作ったが……。

「ウィンドネイル!!」

ブラストが風で切り裂いた。

しかしそこには……。

「雷!?!」

雷属性に姿を変えたタイダルがいた。
タイダルは電撃の準備が出来ていた。
そして……。

「トールアンガー」

大きな音をたて電撃が放たれると同時に、大量の雷が落ちた。

「くっ……」

ブラストは上昇してタイダルの電撃をかわしたが、同時にきた落雷には直撃をくらってしまっている。

「決まったな……もう終わりにしよう。これ以上やると死ぬぞ?」

タイダルがブラストを見下ろして言う。

「まだまだ……まだ戦える!!」

ブラストが吠えた。

「仕方がない……」

タイダルはそう言って距離をとった。

ブラストは空高く上昇し大きく翼を振る。

「トルネードストーム!!」

風が巨大な竜巻となりタイダルに向かっていく。

タイダルは水属性になりアクアイージスを発動した。

水の壁が竜巻に衝突し、わずかに拮抗した後、巻き込まれていく。

「……勝った」

ブラストが勝利を確信したその時……。

「……だから言っただろう。終わりだとな……」

「!?!」

声がブラストの背後から聞こえる。

「なぜ……そこに……?」

背後にはタイダルがいた。

その事実にはブラストは驚く。

トルネードストームがアクアイージスを巻き込んだとき、一瞬だが確かにタイダルがいた。

それなのに次の瞬間、ブラストの背後に現れたのだ。

「その前に戦闘体制を解け。説明はそれからだ」
「くそっ……」

ブラストはタイダルの言葉に従い戦闘体制を解き、シヨウの元に向かった。

海竜王タイダル（後書き）

タイダル

海竜王と呼ばれたかなりの実力を持つ竜。

相反する力である雷も併せ持つ。

地上でも多少、大地から浮いて移動することができる。

イメージはモンスターハンターのラギアクルス。

タイダル（雷覚醒）

完全に雷のみに特化させた姿。

その姿に似合わず、通常時とは比べ物にならないほどのスピードを持つ。

イメージは遊戯王の降雷皇ハモン。

不思議な力

「ブラスト……」

タイダルとの戦いに負けたブラストに声をかけようとしたショウだが。

「……今は何も言わないでくれ」
「……うん」

ブラストの言葉を聞いてやめることにした。

「さて、聞かせてもらおうか」
「ああ……。そのために俺が来たんだからな」
「タイダル」

突然声が聞こえてきた。

「……お前を呼んでいるみたいだが」
「……忘れていた」

タイダルは心なしか小さくなった気がしたのは気のせいだろうか？

「タ〜イ〜ダル〜!!」

聞こえてくる声も少し怒ってるような……。
振り向くと青い髪の女の子が立っていた。
いかにも自分は怒っていますという顔で。
ショウはその女の子を見てオスカのときと同じ不思議な感じがして

いた。

「タイダル！！　なんで私を置いていくのよ！！」

「たまたま昔の知り合いを見つけてな。つい……」

「私に声をかけてからでもいいじゃない！！」

オスカとは違い、怒っているにも関わらずどこか包むような暖かい感じがしていた。

しばらく女の子からタイダルへの説教が続いた。

「ふう……。ごめんね。私はアオイだよ」

説教は終わったのか女の子、アオイは自己紹介をした。

「僕はシヨウ。そしてこっちがブラスト」

「あれ？　ブラスト怪我してない？」

言われて見てみると、雷を受けた後なのか少し皮膚が焦げていた。

「これくらいほつといても……」

「ちよっと待ってね」

アオイが焦げたところに触れた。

「黙ってみてるブラスト。面白いものが見れるぞ」

「もータイダルったら……。まあ面白くはないけど驚くかな？」

10秒ほど触れたあとアオイが手を離す。

「!？」

「……消えてる」

ブラストの皮膚の怪我が消えていたのだ。

「これがアオイの力だ。触れるだけで傷を回復させる」

「生まれつき持つてる能力で原理は分らないんだけどね」

アオイは苦笑した。

「ショウもブラストのパートナーならなにかの力があるはずだぞ」

「えっ？」

「それはないだろう。今までそんなことなかったぞ」

ブラストが反論するが、ショウはブラストのように反論することはなかった。

「まあそれはいい。お前の力はまだ覚醒しきってないからな。それについて教えるぞ」

タイダルの説明中もショウは考えていた。

多分タイダルの言っていた力というのは、アオイを見たときの不思議な感覚。

なにか力を持っている人を見分ける力だと思った。

ただ気になるのはオス力を見たときの禍々しい感覚。

シヨウはタイダルの説明が終わるまでずっと考え込んでいた。

【次話からの注意】

いつも風光の真竜をお読み頂きありがとうございます。
さて、タイトルどおり次からの話なのですが読まれる前に注意が必要
です。

この風光の真竜という作品は続編を予定していた作品であり、その
ために次話からは別の作品の設定が使われてきます。
さらに進行上、とある有名作品の舞台へと移ります。
そのため、一時的に二次創作に近いものとなります。また、
（個人的にクロスオーバー編と称しています）

この部分は約9話に及ぶ予定です。
シヨウとブラストの心情などに大きく影響していく部分でもありま
すので、どうしても省くことができません。
二次創作などに抵抗がある人は申し訳ありませんが、ご了承のほど
よろしくお願いします。

「クロスオーバー編」時空を超えてきた男

タイダル達と別れた後、ブラストは特訓を始めた。

ブレイズを完全に倒すにはブラストの光の覚醒が不可欠らしい。

覚醒するための条件はそれぞれ違うから、いろいろとやってみたらどうだと言われたそうだ。

そのことをブラストから聞いたショウは当然呆れられたが。

そんな特訓が一ヶ月ほどした頃……。

「うわっ!？」

遠くから声が聞こえてきた。

「いつてみよう」

「ああ」

「もう!! コウヘイがいきなりあんな大技使うから制御しきれなかったじゃないの!!」

「しょうがねえだろ!! 七瀬が今にも殺すような勢いで攻撃してきたんだから!!」

「コウヘイがあんないたずらさえしなければそんなことしないんだよ……。大体なんなんだよ!! 寝ている間に鼻の前で髪の毛結ぶなんて!!」

「泥棒みたいでかわいいだろ」
「どこがだー!!」

見ると小さな女の子と青年が何か言い合っていた。
なんかケンカしているみたいだが……とりあえずシヨウは声をかけることにした。

「どうしたんですか？」
「ん？ ちよつと事故にあってな。別の時空からきたんだが……」
「ちよつとコウヘイ!!」

女の子は弾けるように叫んだ。

「あ」

青年のほうもしまったという顔をしている。

「時空ってなんですか？」

シヨウはその顔に気付きながらも質問した。
遠慮するよりも好奇心のほうに勝ったらしい。

「ま、この世界とは違う世界のことだ。未来かも知れないし過去かもしれないが」
「コウヘイ!？」

女の子のほうはコウヘイが説明しているのに驚いている。

「そう言うなミズカ。どうせ時空を越えるだけの力がたまるのに時間がかかるんだろ。それまで世話になるかもしれないからな」

コウヘイはミズ力を宥めた。

「確かにそうだけど……」

そういいながらも渋々了承するようだ。

「悪い。自己紹介が遅れたが俺はコウヘイ。こっちはミズ力だ」
「僕はシヨウ。こっちはブラストです」

その名前を聞いた瞬間ミズ力は驚き、コウヘイは考え込んだ。

「シヨウ……、ブラスト……。どっかで聞いたような」

「とっ、とりあえずよろしくね!!」

「は、はい」

こうして時空を越えた奇妙な生活が始まった。

【クロスオーバー編】時空を超えてきた男（後書き）

名前で大体わかると思いますが、コウヘイとミズカはTactic
sさまの作品『ONE〜輝く季節へ〜』のキャラクターです。

ミズカのほうが小さかったりと純粋にその作品のキャラとは言えず、
ある設定の作品を持ってきたりもしていますが。

【クロスオーバー編】コウヘイと謎の石（前書き）

ここから何故かは知れないけど（昔書いたものを部分的に修正加えているだけなので）シヨウ視点になることが多いです。
読みにくいことがあるかもしれませんが。

「クロスオーバー編」コウヘイと謎の石

「はっ！！」

「まだまだ！！」

コウヘイさんたちが現れてから早2週間。

あちらの世界で傭兵のようなことをしていたといったコウヘイさんは、ブラストの特訓に付き合っていた。

そして聞こえる何かが斬れた音。

前なら動揺したりしていたけど、最近多く聞くようになってからそういうこともなくなった。

「まだまだだな」

余裕そうな声はコウヘイさん。

これももうお馴染みだ。

「くっ……。まだ慣れんな」

ブラストはコウヘイさんが持っていた武器を貰っていた。

『思創』という武器で見た目ただの大きな手甲だったが、思うだけでその通りの武器が出現するらしい。

実際、ブラストの手から大剣やら槍がなにもないはずの手に出現していた。

「ミズカ頼む」

「わかったよ」

ミズカちゃんが力を込めるとブラストの傷が治っていく。

「相変わらずすごいよね」

「確かに」

ミズカちゃんは本当は精霊に近い存在らしい。

見た目ただの女の子にしか見えないけど……。

その力は時を操るというもの。

この世界にきたのはその力が暴走したということのようだ。

ブラストの傷が治ったのも治療しているわけではなく、時を戻しているだけらしい。

「次、シヨウやるか？」

「はい!!」

ちなみに僕もコウヘイさんから剣術を習っている。

いくらブラストがいると言っても、自分で自分を守るようになっても損はないはずだから。

「いくぞ!!」

「シヨウはオツケーだな」

「え？ 本当ですか？」

僕の訓練の後、コウヘイさんがそういった。

「とはいえ自己防衛程度の実力の話だ。あとは自分で極めていくしかないぞ」

「はい！！」

まだ自分を守るためだけとはいえ、認められたのは嬉しい。

「俺はダメなのか……」

「プラスチックは倒すための力だろ。その程度じゃまだまだだ」

コウヘイさんがプラスチックにダメだしをする。

「そつだ。シヨウにはこれをやろう」

そういつてコウヘイさんは小さな水晶みたいな首飾りを僕に渡す。

「これは？」

「……！？ コウヘイ！！ これはダメだって！！」

ミズカちゃんが怒っている。

別に害はなさそうなんだけどどうしたんだろ？

「これは時空を渡するための装置でな。俺はミズカがいるから必要ないんだが……。ちなみに一度も発動したことないから安心しろ」
「だからって万が一発動したらどうするんだよ！？」

うーん……。別に発動しないんなら問題はないんじゃないかなあ……

…。

ブラストは興味がでたのか僕の後ろから見てくる。

『力——て——れ』

「あれ？」

「どうした？」

なにか声が聞こえたような……。

『力を……貸してくれ』

次の瞬間、光が僕とブラストを包んだ。

「「え！？」」

「「なっ！？」」

コウヘイさんとミズカちゃんも驚いている。
しかし次の瞬間には……。

「……もしかして発動した？」

コウヘイたちの目の前からショウとブラストの姿が消えていた。

「クロスオーバー編」異世界での邂逅

「もう少しだな」

「そうですね」

もう少しでこいつを母親に会わせることができる。
そうしてこの旅最後の休憩をしていたとき……。

「柳也さま……」

「ああわかつてる裏葉」

何かが近くに現れる……。

物の怪か何かはわからないが。

「神奈を起こせ。敵なら逃げるぞ」

「はい」

裏葉が神奈を起こしに行く。

さて、何が現れるか……。

ドスンッ！！

……。

「っ……なんなんだいったい？」

「多分別の世界だと思っただけど……」

目の前には竜と少年。
敵ではなさそうだが……。

「どうしたものかな」

「……なるほど。それでは俺達に敵対する意思はないと」
「はい。そもそもこの世界がどんな世界かも知りませんし」

コウヘイさんにもらった首飾りのせいで時空を越えたらしい。
時空を越えた後、近くにいた男の人に今までの経緯を話した。
最初は突然現れた僕達に警戒していたのか腰につけた武器に手をかけていた。
今は下ろしているけど。

「まあ俺達を襲おうとしている奴があんな現れ方をするわけがないか」

……それを言われると苦笑が浮かぶ。なんせ倒れこんだ状態でこの世界に現れたのだから。

ちょっと恨むよ。コウヘイさん。

「へくしっ!」

「コウヘイ……。またミサオに噂されてるんじゃないの?」

「ん……。なんか違う気がするんだけどな」

「えっと……。あなたたちは」

「おっと自己紹介がまだだったな」

……。そういえば僕も経緯だけ話して自己紹介していなかったよ。

「俺は柳也。神奈の警護をしている」

次に女性が前にでる。

「わたくしは裏葉でございます。神奈さまの女官をしております」
「女官？」

聞いたことない言葉だったので聞いてみる。

「ま、身の回りの世話をする人のことだ」

柳也が答えた。

「ほら神奈。お前も」

うつつと唸りながら神奈と呼ばれた子が前に出る。

「余は神奈備命、神奈じゃ。で、そちらは？」

「僕はシヨウ。よろしく」

「俺はブラストだ」

僕に続けてブラストも自己紹介をする。

「しょう？ どんな字を書くのじゃ？」

「えーつと……」

とりあえず地面に書いてみる。

「……のう裏葉。そち読めるか？」

「……読めませんね」

やっぱり異世界では字が違っただね……。

「……よし、余がそちの名前を決めてやろう」

……えっ？

「それはいいですね」

そういつて裏葉さんは賛同……って！！

「なんでそうなるんですかー！！」

「うおっ！？」

ブラストが驚いた。

……僕がこんな大声だすことなんて早々なかったからかな。

「別にいいじゃないか。別に絶対神奈が決めた名前しろっていうことじゃないんだし」

柳也さんまで……。

「よし！！ これでどうじゃー！！」

あゝ……どんな名前になったんだろ？

【クロスオーバー編】異世界での邂逅（後書き）

さて、予告していた介入する原作はkeyさまの作品『AIR』の過去編です。

シヨウの成長にもかかわるのでどうしても外せなかったんです……。

「クロスオーバー編」未来からの警告

神奈が決めた僕の名前……。
それは……。

『翔』

「お、神奈にしてはいいじゃないか」
「してはは余計じゃ」

そうは言われても僕にはどんなものかわからない。
そのことに気づいた柳也さんが説明する。

「この字の意味は速く走る。空高く飛ぶという意味がある。その竜
とともにいるお前にとって相応しい字だろう」

「読み方は「しょう」じゃ。聞いたままの名前で考えたのじゃが……
…どうかの？」

神奈が心配そうに聞いてくる。
でもそんな心配は無用だ。
だって僕は……。

「うん、ありがとう。大切にさせてもらっよ」

嬉しかったのだから。

「ふ、ふん。余が決めたんじゃ。当たり前じゃ」
「くくつ……。顔が赤いぞ神奈」

柳也さんが苦笑しながらいう。

「うるさいぞ柳也殿!!」

神奈が顔を真っ赤にして憤慨する。

「あらあら。神奈様にもそういうお人が……」
「!? 裏葉!!」

裏葉さんにもからかわれる始末。
なんのことはわからないけど。

「柳也……といったか？」

「くくっ……わ、悪い。なんだ？」

未だに笑っていた柳也さんにブラストが話しかける。

「あんたのその武器……。見せてもらえないか？」
「……これとか？」

腰に下げていた刀を出して聞いていた。

柳也は怪訝そうな顔をするが僕はブラストの意図に気づいた。

「僕からもお願いします」
「……ちゃんと返してくれよ」

そういつて刀をブラストに渡した。

その後ブラストは刀を入念に調べた。

「……できそう？」
「なんとかな。多少出来は劣るが」

「何の話だ？」

僕達の話聞いていた柳也さんが話しかけてきた。

「見ていればわかる。それより返すぞ。少し離れている」
「あ、ああ」

柳也さんは刀を受け取ると後ろへ下がる。
僕もそれに習った。

「のう裏葉。何をしようとしているのかの？」

「さあ……わたくしめには……」

僕のさらに後ろで神奈が不思議そうにしていた。

「……いくぞ」

ブラストはそういうと集中し始める。
彼の手に何かが集まっていく気配。
その何かが形を取っていき……。

「「「……」」」

神奈、柳也さん、裏葉さんの目に映るのは驚愕の一言。
無理もないか。

さっきまで何もなかったブラストの手に、彼の大きさに合わせた刀
が出現したのだから。

「これがブラストの着けている手甲、『思創』の力なんですよ」

「そ、そうか……。異世界の力とはすごいものだな」

「僕の世界ではなくてこれをくれた人の世界の技術ですけどね」

首飾りを指してそういった。

でも、これからどうしよう？

元の世界に戻る方法もわからないし……。

『それについて頼みがある』

「え！？」

「どうした？ ショウ」

「あ、ちよつと待つて」

ブラストを静止するとさっきの声に耳を傾ける。

『俺は本来この世界の未来にいる者だ。だが大切な人が苦しんでい
る。そこでお前に力を借りたい』

「翔くん？」

柳也さんが心配そうに聞いてくる。
しかし待ってと視線を送った。

(……うんいいよ。僕は何をすればいい?)

僕はその声に問いかけた。

『ありがとう。本当なら俺自身がいきたいところだが、俺の力では魂を飛ばすことまでしかできなかった。そこで俺の代わりにある者を救ってもらいたい』

(……その人って?)

僕はなんとなくわかっていた。
そのために僕らはこの世界に来たのだろうから。
しかし聞かずにはいられなかった。

『そこにいる3人……。翼人とその連れだ』

『そのものたちは命を絶たれる運命にある』

未来から過去への警告だった。

「クロスオーバー編」決断

（そんな事が本当に起こるの？）

信じられなかった。

そんな……悲しいことが起こるなんて……。

『だが事実だ』

過去の出来事として記録に残っている。

（……うん。僕にどこまで出来るかわからないけどやるだけのこと
はやってみるよ）

柳也さん達をそんな運命にしたくない。
それだけは確かだ。

『ありがとう……。お前でよかったよ』

それを最後に声は消えた。
……まずは確認しないと。

「柳也さん。ちょっと聞きたいことがあります」
「あ、ああ」

突然雰囲気が変わった翔に柳也は戸惑った。
俯いていたが何かを決意した……そんな雰囲気。

「……翔？」

それは神奈も同じ。

「柳也さん達……追われてますよね」

「「「！？」」」

「そして……神奈は翼を持った人、翼人」

柳也達三人は思った。

なぜ……異世界の住人である翔がそのことを知っているのかと。
柳也は刀に手を置いた。

「なぜ……おぬしがそのようなことを……」

「事実なんだね」

神奈の問いに顔を上げた翔。

その顔を見た瞬間柳也は刀から手を離れた。

翔の顔は悲しそうに見えた。

その事実を認めたくないとも言うように。
その表情を見て斬ることはできなかった。

「翔？」

「大丈夫だよブラスト」

その表情はブラストにも見え、心配そうにしたが翔は止めた。
これから起こること……。

回避しなければいけない未来の出来事。
話さなければならぬから……。

「そんなことが本当に起こるのか……？」

柳也がそう思うのも無理はない。
自分達がこれから迎える未来。
それがわかり、そして悲劇を生むことになるのだから。

「わらわが母君に会いたいと願ったばかりに……」
「それは違うよ神奈」

自分の決断を悔やんだ神奈に翔が否定する。

「神奈が会いたいと言わなければあの社で襲われて死んでいた。その決断は正しかったんだ」

翔の言葉に柳也と裏葉は頷く。
自分達が促したといっても神奈が決断しなければあの社に留まり、自分達も死んでいたかもしれないのだから。

「じゃがこれからどうするのじゃ？　このまま母君のところに行ったところで結果は……」

「このまま身を隠すというのは？」

裏葉の提案に翔は首を振る。

「そうしても時期に限りがあるから。それに未来は決まっているわけじゃないよ」

「どうしてだ？」

柳也の問いの答えをブラストが気づいた。

「そうか。未来に伝わっているのは柳也達三人。俺達は含まれていない」

ブラストのその答えに翔は頷く。

「僕達が来たことで未来は既に変わっているはずなんだ。運命に逆らうことができるかもしれない」

柳也がその言葉にあることに気づく。

「……それは翔くんが俺達の旅に着いて来るということか？」

「それはダメじゃ！！　翔までわらわの運命に付き合うなんぞ！！」

「付き合わせてもらおうよ」

神奈の言葉を遮って翔がしっかりと言う。

「だって神奈とは友達だから。放って置くなんて出来ないよ」

翔の言葉にああと同意するブラスト。

「じゃ、じゃが……!!」

「止める。神奈」

なおも反論しようとする神奈を止める柳也。

「……本気なんだな」

「はい」

翔の真剣な目。

絶対にやると決断した目。

「……わかった。もう何も言わん」

「柳也殿!？」

「神奈」

翔は柳也に詰め寄ろうとした神奈を呼び止めた。

「君は僕が守るよ」

こうして翔とブラストは神奈達に同行することになった。
翔とブラストは運命を変えることが出来るのか……。
それは神のみぞ知る……。

「クロスオーバー編」運命を断つ者

高野山。

神奈の母君、八百比丘尼が幽閉されているといわれる場所に、神奈を含めた4つの影があつた。

既に山に張られた結界の中。

抜ければ高野山の僧でも手が出せなくなる。

そのまま抜けられれば一番よかったのだが、やはりそううまくはいかないらしい。

現れるは武者法師3人。

下がる神奈と裏葉。

翔と柳也が前に出る。

「ここは女人禁制ぞ！」

「田舎侍風情がこの靈山に何用か!!」

怒るように言う法師達とは対照的に、飄々とした態度をとる柳也。

「浮かれて夜道を歩いていたら野狐に化かされたらしい」

そこで一気に真剣になり刀を抜きながら言う。

「……いや、野狸か」

それが合図であつた。

5つの影が交差する。

柳也は薙刀と太刀の二人。

翔は薙刀一人を殺すことなく、一瞬のうちに気絶させる。

攻防が終わり気を抜く二人。

「柳也殿後ろ！！」

「うおっりゃ！！」

どこからともなく太刀を持った別の法師が現れ、柳也の背後を突く。かろうじて脇で押しとめるが時間の問題。加えて翔との距離もある。

距離を離し、一太刀入れようとする法師。

「グオツ?!?!」

しかし振り上げた瞬間崩れ落ちた。

「これでいいのか？」

法師を気絶させた大きな影、ブラストが刀となった思創を担ぎながら翔に聞く。

「うん。ばっちり」

ブラストの問いに肯定する翔。

なぜ次の展開がわかるのに、わざわざ危険な行動を取るのか。その理由はある未来からの警告の時の事だ。

（——それじゃその出来事が起こるのを防げばいいんだね？）

『ああ、だが一つ。その出来事の結果がでる直前で防いでほしい』

（……それって例えば柳也さんが斬られる場面なら、最後の法師が斬りかかる直前に防ぐって事？）

『そうだ。例えその出来事が起こらないようにしても、別の形で結果が成り立ってしまう可能性がある。それを防ぐにはこの方法しかないと思うからな』

（わかった。やってみるよ）

そのため危険を顧みず行動を起こした。

ブラストが最初に出てこなかったのは、相手が警戒して出てこなくなる可能性があったからである。

発案者は柳也。

——初めて会ったとき気圧されたからな。

神奈の翼を見たときより驚いたとは柳也の弁である。

既に結界の外。

あの戦いの後何事もなく進み、神奈の母君がいるとされる洞穴はもう近くにあるはず。

しばらくするとその洞穴が見えてきた。

そこにも結界がらしきものがあつたが柳也が切り捨て、入り口を開く。

中に入ろうとしたときブラストが言った。

「俺はここで待つ」

確かにいきなりブラストが入っても、神奈の母君には驚かせるだけだろう。

それにいくら結界の外であつても法師が来ないとも限らない。そう思い翔は頷づき洞穴へと足を運んだ。

「とまりなさい」

その凜とした女の声は洞穴に入つてすぐに聞こえた。

「わらわを戦に駆り立てるなら、生きてはここを出られぬと知りなさい」

言葉そのものに威厳と気品が溢れている。

柳也は居住まいを正して呼びかけた。

「私は神奈備命が隨身、柳也と申す者です。おそれながら、神奈備命の御母君と推察いたしますが……」

柳也のその言葉に驚きの言葉が聞こえる。

「かん、な？」

「ははうえ……なのか？」

二つの戸惑う声。

裏葉が神奈の衣を脱がせ始める。

翔は戸惑ったが、翼人のことは知っていたため驚きはしなかった。

——光が洞穴に満ち溢れる。

目が慣れた柳也と翔が見たのは神奈の背にある翼。

二人とも聞いてはいたが実際に見るのは初めてである。

二人が思ったことはただ一つ。

——美しい。

言葉に表せないとはこの事だろう。

そんな神々しさを放っていた。

「羽ばたく事すらできない益体なしの翼ではあるが……、もしこれと同じものを持っているのなら……」

神奈のその言葉からすぐだった。

「神奈！」

「母上！」

親子の再会。

しかし次に八百比丘尼が語る事は、既に翔はわかっていた。
だからこそ……。

「今すぐ神奈を連れてこの山から下りなさい」

翔は八百比丘尼が話す前に言った。

「なぜ……それを？ それにそなたは……」

その問いは肯定していることと同じだった。
だからこそ語らねばならない。
自分の素性を……。

「翔。異世界の住人で神奈と共に……」

——ここからが本番。

「そして未来からの警告を伝えに来ました」

——悲しき運命……ここで断ち切る。

【クロスオーバー編】世界の修正力

「そうですか……」

話を聞き終えた八百比丘尼は思いのほか驚いてはいなかった。多少なりともその可能性を考えていたのであるうか……。

「だったら尚のこと神奈とはいけないのでは？」

その言葉に神奈が身体を震わせた。

「だとしても神奈が追われる身だということは変わらない」

未来の世界の伝承では神奈が身を呈して柳也達を逃がしたから生き残ることが出来ただけだ。

神奈を守れることを前提とすると危険なことに変わりはない。

「だからこそ僕達がこの世界に来たんだと思う」

——守るために。

そう心に誓う翔。

「……さすが世界の崩壊を防いだ子であるな」

八百比丘尼のその言葉は小さすぎて翔の耳に届くことはなかった。

「……いいであろう。ただし神奈がわらわに触れることは許さぬ」

「星の記憶……あと呪いですか」

静かにゆつくりと頷く。

翔もそれ以上訊ねることはしなかった。

「……柳也さん」

「ああ」

翔の言葉を合図に柳也は前に出ると、刀を抜き一閃。

檻の鍵はすぐに壊れ、八百比丘尼が出てくる。

神奈が駆け寄るが途中で翔が止めた。

まだ……終わりは迎えてないから。

「この山を降りてからだよ」

まだ安心はできない。

だからこそ、守り抜く。

ヒュウウウ！！

仲間に合図を送るための鏑矢の音。

この音が鳴ったということは、敵に見つかったということ。

「ブラスト！！」

その音を合図に翔は空にいるブラストを呼んだ。

放たれる数多の矢。

だがその矢を遮る様にブラストが降り立つ。

「エアブラスト！」

ブラストの翼が羽ばたき、強力な風が吹く。

その風を受けて矢は次々に落ちた。

——よし、これで

翔がそう思った瞬間。

ヒュッ

たった一本の矢。

どこから放たれたのかもわからないその矢は確実に八百比丘尼へと向かっていた。

「むっ！？」

ブラストの風をまともに受けても衰えない勢い。

翔は急いで矢の射線上に剣を重ねようとした。

トスッ

「えっ？」

矢は……八百比丘尼の胸に刺さっていた。

「おい、誰だ？」

「いや……俺じゃない」

狙っていたらしき弓武者の声が小さく聞こえる。

次の瞬間、弓武者は八百比丘尼が起こした突風に吹き飛ばされ、風の刃に切り裂かれた。

だが翔は今の矢に起きた出来事に呆然としていた。

——翔の剣は確実に矢の射線上にあった。

だが矢は何もなかったようにそのまま突き進んだ。

「なん……で……」

「それが……世界の修正力なのですよ。小さな騎士」

八百比丘尼はその言葉を口にした後倒れた。

「母上!!」

神奈が八百比丘尼に近づき、柳也と裏葉も続いた。耳を凝らせば多くの武者が近づいてくる音がする。

「どうする翔？」

ブラストの問いに翔は迷っていた。

——未来は繰り返されてしまうのか

「クロスオーバー編」鎮魂歌

世界の修正力とはあるべき形に戻そうとする力。

本来、矢に射抜かれる運命にあった八百比丘尼。

しかしその運命を変え、ブラストが矢を全て落とした。

ブラストがそばにいる間、矢に射抜かれる可能性は限りなく低い。

しかしそのままでは完全に歴史が変わってしまうため世界の修正力が働いた。

必ず八百比丘尼が矢に射抜かれるように修正力が働いたのだ。

異世界の生物であり最強と謳われる竜、その中で風の力を持つブラストの風を受けて落ちない矢なんてそうそうない。

まして翔が完全に射線上置いた剣の防御をすり抜けるなんて業……

人間では決してありえないことである。

結果、多少歴史は変わってしまったが結果的には変わらない。

今この状況で翔にできることは……

八百比丘尼はまだ息は残っているものかなり拙い状態にある。

さらに気配だけが確実に周囲を囲まれ始めている。

「はは……うえ……」

神奈は八百比丘尼に抱きついて泣いていたが、神奈の頭に手が置かれた。

「ははうえ？」

「かん……な……」

八百比丘尼本人である。

「自分の……成すべきことを……やりたいことをやりなさい……」
「!？」

それはどのようにも取れる言葉。

そう……歴史通り守るために飛ぶことも許すということでもあった。

「なぜ!！」

「小さき騎士……覚えておきなさい。世界の修正力に……逆らうと
いうことが……どれだけ難しいのかを」

——そして次の糧にきなさい。

言葉にこそしていなかったが翔にはそういつているように見えた。
だが翔は信じたくなかった。
それは諦めるということ。

神奈を助けることを……諦める。

神奈が……あの辛い出来事に。

「……わかったのじゃ」

「神奈!？」

「神奈様!？」

突然の神奈の言葉に驚く柳也と裏葉。

翔がその方向を見ると背を向けて翼を広げている神奈の姿があった。

「神奈！？ 何を！？」

「翔」

その声には何者も寄せ付けない覚悟があった。
翔が神奈を守ると決めた時のように。

「柳也、裏葉」

神奈は今だ背を向けて言う。

「短い間じゃったが……楽しかったぞ」

その言葉とともに上空に飛んだ。
柳也たちを助ける囀として。

「神奈！！」

翔がそう呼びかけるも神奈は止まらずさらに高く飛ぶ。
神奈のその姿は地上で襲ってきた武者たちに見つかり、矢が無数に放たれる。

「ブラスト！！ お願い！！」

さすがの翔も空にはいけずブラストが空を舞い矢を落とす。
しかし……

「なっ！？」

「また修正力！？」

再び現れる修正力の矢、絶対に避けることの出来ない矢。
世界の修正力が働いた矢はブラストの風を貫き、思創で出現させた
剣をすり抜けて神奈に突き刺さる。

「ブラスト!!」

「わかってる!! わかっているが……」

どうにかできるものでもなく、まして今でも神奈を狙う無数の矢を
放って置くわけにもいかない。
ブラストは完全に足止めを食らっていた。

「なんだあれは？」

柳也の言葉は神奈に向かう赤の鎖。

「呪詛の鎖……ダメだ!! あれを完成させたら……」

——守るって決めたのに……!!

「かなー!!」

呪詛の鎖が完成しようとしたそのときの翔の叫び。
そのとき一面に光が広がった。

まるで翔の叫びに答えるかのように

次の瞬間その場にいる者全てがその光景に見惚れた。
翼人に巻きつこうとしていた鎖が消え去っていたこと。
そしてその翼人を守るように白く大きな翼を携えた竜が側にいた。

その竜は唄っていた。

その唄は翼人を怨む者の心を静め、戦意を落とした。

唄はどこまでも広がりいつからかこう呼ばれるようになった。

魂を鎮める歌『鎮魂歌―レクイエム―』と……。

【クロスオーバー編】鎮魂歌（後書き）

ブラスト（光覚醒）

シヨウのパートナーであるブラストが光の覚醒をした姿。この姿では風が使えず、通常攻撃は光球での攻撃となる。イメージは成竜状態をさらに巨大化させた姿。

【クロスオーバー編】それぞれの世界へ

「……は……」

翔は不思議な空間にいた。

自分が落ちているのか昇っているのか。

進んでいるのか後退しているのか。

そういう思考はあるのに、自分が存在しているのかさえわからない。

——ここは時空の狭間。

様々な世界の境界線にある何もない世界。

翔の持つ石が光ったとき、この世界へと運ばれていた。

「そうだ……神奈は……」

翔が見ていたのは呪詛の鎖が完成しようとする直前まで。

守ると決めたのに自分はこんな所にいる。

焦るのも無理はなかった。

そんな翔にあの声が答えた。

『大丈夫だ。あの翼人は救われた』

「そんなの……信じられないよ」

最後に見たあの光景は明らかに絶望的だった。

あの状況を覆せるのはまさに奇跡に他ならない。

翔はその越えの言葉を信じられなかった。
——パートナーの声を聞くまでは。

「大丈夫だ翔。神奈はちゃんと生きている」

「ブラスト……？」

「お前の守るという想いが俺に新たな力をくれた。光の覚醒という新たな力をな」

そのまま自分があの世界から消えるまでの顛末を話すブラスト。

その姿は見えないものの確かにブラストの声だった。

ブラストは隠し事をして嘘はつかない。

ブラストとの信頼の絆がその言葉を証明していた。

『……む、あのバカ』

「どうしたんですか？」

突然の声に翔が聞いた。

『いや、あんた達がせっかく助けてくれたにも関わらず人生を終わらせようとしているバカがいるんな。一発殴ってやらんと』

その声は物騒なことを言っているにも関わらず嬉しそうだった。

『もう少しであんた達の世界だ。色々とすまなかったな』

「いえ、僕はやりたいたまですから」

それは確かに翔の本心。

大変ではあったけど、それ以上に神奈達との出会いは嬉しいものだ

った。

『そういつてもらえると助かる。最後に八百比丘尼からのプレゼントだ。しっかり受け取ってくれ』

「えっ？」

翔がそのことを聞く前に、意識がだんだんと薄れていく。それと同時に、自分の存在が構築されていくような気がした。意識が完全に途切れる寸前、声の主が何か言った気がした。

『小さな騎士と竜の行く末に祝福があらんことを……』

「……ん、ここは……」

次にシヨウが目を覚ましたのは小高い丘の上だった。

「よう。目、覚ましたか」

声のしたほうを向くと風の覚醒状態のブラスト、そしてコウヘイ、ミズカの姿が。

「……夢？」

「いや、現実」

あまりの出来事ゆえに夢だったのかと思ったシヨウに、コウヘイがシヨウの側にあるものを指差した。

そこには一本の鞘に収まった刀。

ブラストが『思創』で出したものなら手から離れると消えるし、コウヘイが持っていたものでもない。

シヨウが鞘から抜くと、白く羽を思わせる波紋の刃を持つ刀の姿が現れた。

「……ダブルエッジ。二枚刃の刀か」

よく見ると刃に若干の隙間があり、二つの刃が重なっているのがわかる。

「ちょっと振ってみろ」

コウヘイに言われるがままに振ると、ヒュツという風を斬る音ではなく、キィイという甲高い音が聞こえた。

「それがダブルエッジの特徴。風が刃と刃の隙間に入って甲高い音

を出すんだ」

「これ……どこで？」

未だにあの出来事が現実だったのか夢だったのか、区別がつかない
ショウはそんなことを聞いた。

それに答えたのはミズカとブラスト。

「この世界に戻ってきたときから大事そうに抱えてたんだよ。コウ
ヘイが気になって鞘から抜こうとしてたけどそれも許さなくて」

「あの声が言っていただろう。八百比丘尼からのプレゼントだって」

二人のその言葉にようやく夢ではないと確信したショウ。
その表情は嬉しそうだった。

「さて……と、そろそろ帰るか」

「えっもうですか？」

コウヘイ達が来て数日しか経っていないと思っていたショウは、そ
んなことを言った。

「ま、お前たちが消えてから七日経ってるしな」

その事実には驚くショウと事前に聞いていなかったのかブラスト。

「時空を越えるってそういうことなんだよ。同じ時間に戻ろうとし
てもずれちゃうし」

「ま、今回は少しくらいずれたほうがいいんだが」

ミズカの説明にそう言うコウヘイ。

「またミズカが心配するよ？」

「ナナピーに追い掛け回されるよかマシだ」

またちょっとした口論になる二人。

だがショウには言わなければいけないことがあった。

「ありがとうございました！！」

その言葉に同時に口論を止める二人。

少し見合ってからどちらも

「気にすんな。俺としても楽しかったし」

「うんうん」

笑顔でショウの言葉を受け取った。

「よしっいつくよ」

ミズカがそういうとなにか靄のようなものが現れた。
世界から少しずれたようなその場所。

時空の扉への入り口。

「おっそうだ」

コウヘイはそういうと何か書かれた紙を取り出した。

「その刀の名前、ないようだから俺が考えてみた」

その紙をシヨウに渡す。

シヨウが紙を見るとこう書いてあった。

『歌翼』

「歌うように鳴る翼のような刃で歌翼。どうだ？」

シヨウは喜んでその名を受け取った。

神奈がくれた自分の名前『翔』と同じく嬉しかったから。

コウヘイは時空の扉のほうに向かいながら手を上げてこう言った。

「頑張れよ！」

コウヘイがどんな思いでそんな言葉を口にしたのかはわからない。
それでもシヨウは大きく返事をした。

「はいっ！」

コウヘイは満足そうに頷くと、その扉の先へと足を踏み出した。
自らがいる場所、待つ人がいるその場所へと……。

「不思議な体験だったね。ブラスト」

「……そうだな」

二人はコウヘイが来てから今までの出来事を振り返っていた。
異世界からの訪問者、自分達がいった別の世界。

そして少しの間だったけど守りたいと思った一人の少女。

「これからよろしく頼む『思創』」

ブラストはその手につけている籠手に向かってそう言った。
それにシヨウも続くことにした。

「これからよろしくね。『歌翼』」

その二枚刃がシヨウの言葉に答えるように光った。

【クロスオーバー編】それぞれの世界へ（後書き）

おまけ

「くおらあー!! 浩平ー!!」

「くそっ!! なんでこんなときに限ってどんぴしゃな時間に戻ってこれるんだ!？」

元の世界に戻った浩平は七瀬に追いかけていた。

かなり低い確率にあるにも関わらず、消えた時間とほぼ同時の時間に戻ってこれたのだ。

だがそれも浩平にとっては嬉しくないこと。

シヨウの世界に来る前と同じく逃げ回る羽目になっていた。

「ミズカ! クロックアップー!!」

「嫌」

一言でミズカにそう返される浩平。

時空を越えたもとの原因はその力であるがためにそうそう使うわけにもいかないのも事実。

「狗迅走破ー!!」

「ぐぎゃああー!!」

空の遙か彼方へと吹き飛ぶ浩平。

「はあ…… またなんだよ」

幼馴染がそうため息を漏らしていた。

「クロスオーバー編終了のお知らせ」

『時空を超えてきた男』から始まったクロスオーバー編も『それぞ
れの世界へ』で終了となりました。

クロスオーバーキャラは『ONE』輝く季節へ』からコウヘイと
ミズカ。

また、『AIR』から柳也、裏葉、神奈、八百比丘尼でした。

AIRでは原作準拠でしたが、ONEのほうは完全にオリジナル設
定になっています。

浩平が傭兵紛いのこととしている時点で違いますしね。

その部分は自分の作品全体にかかわっていくものなので、今は説明
できなかったりするんですけど。

さて、これでクロスオーバー編は終了であり、次から最終章に入る
わけですが、実はクロスオーバー編は後一つだけあります。

内容は『鎮魂歌』の後のAIRサイドの話。

ただしこれは、今後の展開におけるかなりのネタばれを含むため、
本編完結後に公開しようと思います。

それまでお楽しみに。

神竜杯

「神竜杯？」

異世界での出会いから半年。

シヨウとブラストは各地を転々としながら大会に勝ち続けていた。今までカイク・デュークやアオイ・タイダルに当たることはなかったが……。

そんな日々を過ごし、今回も優勝してコロシアムから出ようとしたときに呼び止められた。

「ああ。最近各地で竜種が優勝していることから開催されることが決まった大会だよ。優勝経験のあるものが対象で世界中の竜種が一斉に集うことになっているんだ」

係員がそう言うのに興味がないとばかりにブラストは先に出ていくとする。

大してシヨウは興味があるらしく係員に質問した。

「それって今現在で出場している人わかります？」

「そうだな……」

係員は少し考えた後、いくつか上げた。

「ヘイルとエア、セインとゲムグ、ガゲツとデス、アオイとタイダル……」

タイダルの名が出た瞬間ブラストは歩みを止めた。

「その大会、受けます」

シヨウはブラストの行動に苦笑しながらそう言った。
係員は突然参加を決めたシヨウに面を喰らいながらも言葉を返す。

「あ、ああ。大会は1カ月後。ゴルドルクが会場だ」
「わかりました」

「何で受けた？」

さっそく会場であるゴルドルクへ向かう道中、ブラストがシヨウに聞いた。

「だってブラストも興味持ってたよね？」
「むう……」

タイダルの名が出た後の事は、事実であるため言い返すことの出来ないブラスト。

「それに僕も久しぶりに会いたかったしね」

そう言った後シヨウはブラストの手にある籠手を見る。

それは以前にコウヘイに貰った思創。

あの日から今までブラストは、異世界で柳也の持っていた刀を基本に訓練を重ねてきた。

偶然起こったあの出会いを無駄にしないために。

「ブラストもその力を試したいみたいだったし」

日々訓練しているブラストの側にいたから解るシヨウ。

最初こそまったく出来るような感じはしなかったが、今ではもう一歩のところまで近づいているその技。

タイダルという目標ができた大会には間に合うだろう。

「ああ。完成させてみせるさ」

ブラストは思創で刀を出してそう言った。

「それにしても懐かしいね」

「ん？」

「ブラストが……そのときはバハムだったかな？ 僕を初めて助けてくれた場所」

「……ああ、そうだな」

ダイヤルを退けたあのときから始まったこの出来事。

あれから約1年半。

様々なことに巻き込まれ何度か危険なこともあったが、一緒に成長していった。

ブラストも、シヨウも。

そしてこれから向かうのはその原点の地。

なにか起こる気がする。

良いことか悪いことか、わかりはしないけど。

また一步成長する。

ブラストもシヨウも。

そんな風にシヨウは感じていた。

「一緒に頑張ろう。ブラスト」

「もちろんだ。シヨウ」

向かう地は物語の始まりゴルドルク。

運命は終結へと向かっていく……。

集結する竜

時は流れ一月。

シヨウとブラストはゴルドルクにいた。

世界でも有数の大都市であるゴルドルクでは大会が多く開催される。ブラストが初めて覚醒したあの大会や今回の神竜杯がその例。

竜種モンスターの最強を決める大会だけあって町はお祭りムード。

そんな中シヨウは何か思いつめるような顔をしていた。

「どうした？ シヨウ」

「あ、うん……大丈夫。多分気のせいだから……」

このときシヨウはある気配を感じていた。

しかしその気配があまりにも小さいため気のせいだと思った。

例え確信していたとしても、早いか遅いかだけで避けられないことではあったが……。

「シヨウ？ シヨウじゃねえか！」

呼びかける声に振り返ると一人の男と一匹の雷竜。

「カイルさん！ デューク！」

シヨウとブラストが大会に出るきっかけとなった一組だった。

「久しぶりだな。もしかしてこっちはバハムか？」

カイルが知らないのも無理はない。

彼があつたのはあの覚醒のときの一度だけ。

幼竜の姿と覚醒した姿、この場合は成長した姿になるが……それだけなのである。

最近のブラストは風の覚醒が普段の姿になっているため余計に判別しにくい。

「あ、はい。今はブラストって名前に変えてますけど」

「なるほどな。やっぱりか」

「あの……やっぱりって？」

カイルの知ったような口ぶりに疑問を表すシヨウ。
それを聞いたカイルはニヤツと笑った。

「大会荒らしのブラストとシヨウって聞いたんだ。お前たちじゃないかとね」

うつと嫌そうな顔をするシヨウ。

「そ、それをいっいたらカイルさんもじゃないですか」

「俺はいいんだよ。もう慣れてるから」

シヨウ達と出会う以前から言われていたので、気にしていないらしい。

ちなみにこの二組、大会荒らしといわれている割には一度も同じ大会に参加したことがない。

本当に偶然ではあるが。

「んじゃそろそろ行くぜ。後で大会でな」

「はいっ」

「さあ始まりました神竜杯！ 数々の大会を制している種族。竜族の頂点を決める大会です！！」

大きな歓声でコロシウムが揺れる。

「すごい……ね」

シヨウとブラストはその歓声の中心にいた。

「さあ！ 第一試合は風の竜同士の対決！ 大会荒らしの翼竜人、ブラスト&シヨウ！ 何やら剣らしきものを持つての登場だ！！」

一際大きな歓声が上がる。

そう、シヨウとブラストは大会開始の第一試合に選ばれたのである。ブラストは既に思創で刀を出していて準備は万端。

「対するは大空を自由に舞う翼竜、エア&ヘイルだ！！」

エアは腕と翼が一体化した竜で、空からの攻撃が主な戦法となる。空を統べる者として評判の存在である。

こちらもいつでも空へと飛べる状態。

「では参りましょう！ 記念すべき第一試合……開始！！」

その合図と共にエアは空へと飛び戦闘態勢を取る。

しかしブラストはすぐに攻撃する様子もなく、その場で刀を構えたまま。

そんな行動をいぶかしんだエアは、遙か上空でブラストの次の行動を待った。

——それが命取り。

ブラストが持つ刀に風が纏わりついていた。
常識ではありえない光景。

しかしブラストの力がそれを可能にしていた。
下段に構えたその体勢から思い切り振り上げる。

「エア……スラッシュ」

大気が斬撃と化しエアへと向かっていく光景は、彼らが異世界で見

た八百比丘尼の風の刃に似ていた。

エアはその大気の斬撃が何かもわかることなく受け、地へと落ちていく。

コロシウムにいた観客はそれを呆然と見ていただけだった。

やがてエアの身体が地へ完全に落ち轟音を立てたとき、ようやくその光景が現実だと観客は悟り、大歓声が起こった。

「しょ、勝利！ 何が起こったのかわかりませんが勝者はブラスト＆ショウ！」

ブラストは地面に転がるエアに向かってこう言った。

「安心しろ。峰打ちだ」

一撃で終わったことによるブラストの皮肉。

刀の峰ではないものの、衝撃だけで打ち落としたのだ。

対戦相手であるヘイルは何のことかわからず、ただ去っていくショウとブラストを見つめていた。

二組の大会荒らし

試合が終わったシヨウとブラストは個別の控え室にいた。

これには開催者側の意向で二つの理由が挙げられる。

一つは選手間の乱闘の防止。

モンスターの中にはマスターとなる人間の言うことを聞かずに、敵と認識すると勝手に攻撃するものもいる。

実際地方の小さな大会では、合同の控え室で乱闘が起こり戦闘不能続出。

大会そのものが中止になった例もある。

ましてや今回は各地で優勝した猛者が集まる大会。

万が一乱闘が起きた場合、甚大な被害が予想されるためこのような措置がとられている。

もう一つは大会のルールによるもの。

大会の試合形式はトーナメント方式だが、選手側には次の対戦相手が知らされていない。

これは試合前での対策をとらせないためである。

出場しているドラゴン是有名なものも多く、どのような戦闘方法を取るのか広く知れ渡っているのが現状。

そのためどうにかして勝とうと色々な策を弄してくる輩もいる。

もちろんルール上では問題ないのだがこのような試合は総じて観客の受けが良くない。

腹の探りあいとなり、大会本来のモンスター同士の決闘というものではなくなるからだ。

そのようなことをできるだけ少なくするために、対戦相手を知らせていない。

「ねえブラスト」

「なんだ？」

「あのエアスラッシュって……」

シヨウは先ほどブラストが試合で放った技『エアスラッシュ』にどこか見覚えがあった。

「多分シヨウが考えている通りだろう。八百比丘尼のあれだ」「やっぱりそうなんだ」

シヨウが考えていたのはあの異世界での出来事。

八百比丘尼が矢に撃たれたとき、時間を稼ぐために起こした暴風の中の風の刃に似ていた。

ブラストはそれを自身の力で風を刃に纏わせ、振る直前にその風を圧縮。

刃で撃ちだすことで風の刃を可能とした。

目で確認できたのは風の刃が周りの大気より遙かに密度が高く、光を屈折させていたためである。

「そつえば柳也さんにも何か教わっていたよね？」

「そつちは完全にものになっている。後のお楽しみだ」

話が終わると同時に扉を叩く音。

「第二回戦第一試合、シヨウさんとブラスト選手の試合となります。準備をお願いします」

「対戦相手は？」

係員に呼ばれたということはもうすぐ試合ということ。

それならば教えてくれるかもしれないと思ったシヨウはそう聞いた。

「迅雷の大会荒らし。デュークとカイルさんです」

「！……わかりました。すぐいきます」

「ブラスト！」

係員の去る足音が消えてからシヨウは言った。

「ああ、一度戦ってみたかった」

初めて会った当時は観客と選手という間柄だった。

それから一年半。

観客は選手となり期待の新星として、各地の大会を制覇していった。一方の選手も変わらず勝利を続け、いつからか異名を持つようになった。

しかしこの二組はこれまで一度も大会で戦うことがなかった。

その二組が今、時を経て神竜杯という最高の舞台で戦うことになる。何の因果か同じ異名『大会荒らし』の名を背負って……。

「さあいくぞ。シヨウ」

「うんっ。絶対に勝つよ！」

「神竜杯も第二回戦に突入しました！ 二回戦第一試合は両者とも有名！ ここにいる人の中にこの二組の名前を知らない人はいないでしょう！ 『大会荒らし』の登場です！！」

先に出るのはショウとブラスト。

一回戦と同じく思創で刀を出しているが今回は鞘に納めている。

「一回戦では秒殺を見せてくれました！ 武器を操る翼竜人！ 疾風の大会荒らし！ ブラスト&ショウ！！」

一回戦の時と負けず劣らずの歓声が上がり、コロシウムそのものが震える。

「対しましては驚きの戦法を見せてくれた雷竜！ この二回戦でもその姿は見られるのか？ 迅雷の大会荒らし！ デューク&カイル！！」

現れるは竜人デュークとカイル。

一回り大きくなったような感じはするが、大きな変化は見られない。昔と同じ重量級のパワータイプ。

「まさか武器とはな。どういう戦法を取れば秒殺なんてできるんだか」

さっそく挑発めいたことを言うカイル。

「そつちこそ驚きの戦法ってなんでしょう？ まったく想像がつかないけど」

対するショウも負けてはいない。

互いににらみ合いが続くがふと両者の緊張が途切れ共に苦笑い。

「成長したなショウ。あの時はただの青臭いガキだと思っていたが」
「まあ僕も色々ありましたから」

そこで言葉を区切り、改めて向かい合う二組。

「第二回戦第一試合、ブラスト&ショウ対デューク&カイル!!」

そうするのを待っていたかのように司会から合図が入る。

「いってこい！ デューク！」
「いくよ。ブラスト」

互いのパートナーに声をかけ……。

「試合………開始!!」

戦闘が始まった。

疾風対迅雷

試合開始後すぐに上空へと飛び距離を取るブラスト。流石のブラストもデューク相手に力押しは厳しいと判断したのだから。

その証拠にブラストが立っていた位置が雷撃によって黒く焦げていた。

なおもブラストに向けて雷撃を放つデュークだが、遙か上空にいるブラストにはそうそう当たりはしない。

ブラストも何故か刀を鞘から抜かずに突風のエアブラストで牽制しているだけで決定打を与えようという素振りがない。

数分ほど続くとカイルは業を煮やしたのかデュークに指示を出した。

「デューク！ サンダーストーム！」

雷の暴風と称されるその一撃。

雷撃のほとんどの攻撃範囲は線として捉えられる。

しかしこのサンダーストームは違う。

デュークのサンダーストームは直径30mにも及ぶ面の雷撃。

視認してからの回避は元々の雷の速度も相まってかなり困難。

しかしブラストはそれを待っていた。

デュークが攻撃のために深く構えるのを確認するとすぐに急降下。

サンダーストームの弱点。

それは攻撃の準備で溜めが必要なこと。

溜めが完了する頃には既にブラストは目前にいた。

しかしまだブラストの攻撃が届く範囲には距離がある。

そう思いデュークはサンダーストームを放った。

目前に広がるのは雷の壁。

その壁がすさまじい速度で向かってくる。

ましてやブラストはまっすぐに突進するような格好。

確かに避けることは不可能だろう。

……風の加護を受けているブラストでなければ。

ブラストはサンダーストームが放たれると同時に、風を操作して横風を吹かせる。

その風を追い風に急転回。

紙一重で面での雷撃を避けた。

そのまま旋回して刀を抜き、デュークの背後を取る。

デュークもそれはわかつているはずなのだが動きが鈍い。

サンダーストームのもう一つの弱点。

その雷撃の強力さゆえに……反動が数秒続いてしまう。

デュークがその反動で動けない隙に、ブラストは刀の峰で思い切り振り切った。

デュークはその衝撃でコロシアムの外壁へ衝突した。

「決まったー！ 雷の壁を避けて逆に鉄の塊の一撃を決めたブラスト選手！ 勝者は……」

「いや、まだだ」

司会の声を遮るカイル。

確かにまだデュークは動けるようだが必殺の一撃を避けられた以上、

本来ならこれ以上の策はない。

「カイルさん……。これ以上は……」

シヨウもカイルに試合終了を促す。

……だが。

「まだ切り札は使っていないさ」

次の瞬間、空は晴れているにも関わらずデュークに雷が落ちた。

「おつと！？ 一回戦で見せてくれたあの姿！ この二回戦でも見られるのか！？」

「シヨウ、なんでデュークが迅雷の大会荒らしと呼ばれているか知っているか？」

考えてみれば確かにおかしい。

迅雷という言葉は本来激しい雷鳴、対処する時間がないことを表す。

「俺たちはお前たちに会った後、新しい力を手に入れた」

だがデュークは重量系の竜人。
まるでイメージが一致しない。
ならばその名が表すのは……。

「デュークの新しい力、ライティングモードだ」

雷光が消えた後、雄叫びと共に現れたのは獣のような四足の竜となったデュークの姿だった。

「ブラスト……」

「ああ、間違いない」

それは以前に戦った火竜、ダイルと同じ現象だった。

ブレイズがこの地に足を踏み入れた影響の一つ。

その力は元の姿の力とは一線を介す。

見たところダイルのように暴走する様子はなさそうだが力に関しては予測不能。

そのため距離を取って体勢を立て直そうとしたが……その姿が消えた。

「なっ!?!」

10mもの間合いを一瞬で詰めてきたのだ。

そのまま前脚で攻撃しながら脇を通り過ぎる。

ブラストがデュークのほうを向くと既に次の攻撃の態勢になっていた。

デュークのライティングモードはスピードを最大限まで特化させた姿。

そのスピードは視認できたとしても行動に移すことの出来ない速度。来ると思った瞬間には既に攻撃を受けていて、脇を通り過ぎている。もちろんそこから攻撃を仕掛けても既に手遅れ。

そんなスピードでデュークは動いている。

つまり目で確認したから行動を起こすようでは遅いのだ。

かといって先読みして攻撃してもデューク自体がそのスピードに慣

れ、その中で自在に動くことが出来るため対応のしようがない。
事実この姿になったデュークは一度も直撃を貰ったことがない。
弱点としては攻撃力が下がっていることだがその弱点を補っても余
りあるほどの力である。

「ブラスト！ 空だ！」

シヨウの指示は最良だった。

確かに空へと逃げれば空を飛ぶすべを持たないデュークは追っては
これない。

しかしデュークがそれを許すはずもなかった。

シヨウの指示通り空へ飛ぼうとブラストが翼を広げた瞬間、その翼
に向かって攻撃をしてくる。

バランスを崩したブラストは再度体勢を立て直すも、執拗な翼への
攻撃に地に脚を着けざるを得ない。

デュークはさらにスピードを増し、ほとんど隙がなくなっていた。

いくら攻撃力が低くてもこのままではダメージが蓄積し、いつかは
倒れてしまうだろう。

「さあどうする？ シヨウ、ブラスト」

シヨウが策を考えているとき、ブラストは既に次の手を取り始めていた。

刀を鞘に戻し、腰を落として低く構える。

ブラストの行動に気付いたシヨウが心配そうに見るが、ブラストは目で大丈夫だと伝えた。

シヨウは少し考えるもすぐに頷く。

ブラストは未だデュークの攻撃が続く中、目を閉じて精神を集中させる。

――数瞬後

「さあデューク選手ゆうせ……えっ!？」

司会が驚くのも無理はないだろう。

先ほどまで優勢だったデュークが地に倒れ伏せ、変わりにブラストが刀を抜き放った姿で立っていたのだから。

「抜刀術……閃風」

ブラストが小さく呟いた。

抜刀術。

居合いとも称されるそれは神奈達の異世界の技術で、刀の特性を活かした一撃必殺の大技。

刀剣の刃を鞘内で疾らせ抜き放つことにより剣速を二倍、三倍に加速させ、相手に攻撃の間を与えずに切り伏せる。

だがこの抜刀術にブラストの風を操る力が加わったらどうなるか。鞘内に圧縮した空気を奥に留めて抜き放つと同時にその空気を爆発させる。

そうなれば二倍や三倍どころではない。

五倍、十倍に加速して相手を切り伏せることになる。

もちろん制御は難しくなるが威力は見ての通り。

雷の如きスピードを誇ったデュークが完全に倒れているのである。

「な、何が起こったのかわかりません！あの状況からどうやって打開したのか見当もつきません！しかし今のこの状況は事実！勝者、ブラスト&ショウ！！」

「よくやったな。シヨウ、ブラスト」

「カイルさん……」

未だ歓声が続く中、シヨウとカイルは向き合っていた。

「まさか二回戦で負けるとはなあ。もう少し上位にいけると思っていたんだが」

「……僕、絶対勝ちますから。ね、ブラスト」

ちよつと戸惑いながらも自分の意思をカイルに伝えるシヨウ。

その行為に面を食らったカイルだったがすぐに笑みを浮かべた。

「やっぱり変わったな、シヨウ。前はもつとおどおどしていたが…

…約束だ。全力を尽くせ。そして勝ち続ける」

「はいっ!」

シヨウの言葉に満足したカイルは、デュークを連れ立って会場を後にした。

それを見送ったシヨウも控え室に戻ろうとブラストに振り返った…
…そのとき。

「っ!!!」

今までにない悪寒がシヨウの身体に走った。

「どうしたシヨウ？」

表情にも出ていたのだろう。

ブラストは心配そうに聞いた。

シヨウはしばらく沈黙していたが一言だけ発した。

「……ブラスト、もしかしてこのコロシウムにいるかも知れない」
「……何がだ？」

ブラストの頭にもある者が浮かんだが気のせいだと思い振り払った。

——だが。

「この禍々しい感じ……間違いない。オスカとブレイズだ」

——悪夢はここに再来する——

——そのときまで……あと少し——

疾風対迅雷（後書き）

デューク（ライトニング）

カイルのパートナーであるデュークがブレイズの影響で強化された姿。

ダイルの炎竜とは違ってある程度のコントロールはできるようである。

重量系の竜人であった通常形態とは違って、四足の獣のような姿でのスピードタイプとなっている。

イメージはモンスターハンターのナナ・テスカトルの翼がなく、体が黄色い姿。

好敵手 ― ライバル ―

数々の対戦相手である竜を次々と倒していくブラストとシヨウ。幸いデュークより強い相手もおらず、難なく勝ち進んでいた。係員からの報告で次は準決勝ということも二人とも聞いている。しかしその表情は険しいもの。

二人の考えていることはただ一つ。
オスカとブレイズのこと。

かつて自分達を死の淵まで追いやった一組。

それが今、この近くにいます。

あのかきは謎の光の壁に助けられたが、今回もそうなるとは限らない。

状況的にブラストが出したと思われるのだが、ブラスト自身どうやってだしたかわかっていないからだ。

それにいつまでも逃げているわけにはいかない。

いつかは倒さなければいけない相手。

なら今回で倒す。

そういう気迫が二人にはあった。

「…………アオイとタイダルは大丈夫かな？」

シヨウが心配しているのはブレイズを倒す同士である二人。
水の竜、海竜王の異名を持つ新たに雷の力を得た海竜タイダル。
触れただけで傷を癒す能力を持つ少女、アオイ。

過去にブラストを圧倒したタイダルだが、ブレイズにもそうなることは限らない。

ましてタイダル自身が言う通りならば、止めを刺せるのは光による攻撃のみ。

深手を負わせることが出来てもだ。

あの禍々しい気配を持つタイダルが何かする可能性もある。

「あのタイダルのことだから大丈夫だとは思うが……連絡できないのは痛いところだな」

大会のルール上、他の選手に会うことは許されていない。

行った場合、闇討ちとみなされ永遠に大会の出場権を剥奪される。ブレイズがこの近くにいとわかったとき、真っ先に向かおうとしたシヨウだったがブラストがそれを止めた。

シヨウは剥奪されても構わないと言ったが、それでもブラストは首を縦に振らない。

彼にはシヨウに話していない事実があったのだから……。

「シヨウ選手、ブラスト。準決勝の準備をお願いします」

「対戦相手は？」

シヨウは二回戦以降毎回聞いていた。

偽名を使っている可能性もないことはないが、知っているに越したことはないのだから。

「青の雷光、アオイ選手とタイダルです」

噂をすれば影とはこういうことを言うのだろう。

「ということは……？」

「決勝はブレイズか……」

大会そのものに参加していない可能性もあるものの、確信を持った二人は会場へと脚を向けた。

「さあ神竜杯もついに準決勝！ その第二回戦が始まります！」

司会の言葉が会場に響き、観客席から歓声が上がる。

ということはタイダルが戦っていない限り、決勝の相手は大会に出場していればブレイズということになる。

『タイダル、お前ブレイズと戦ったか？』

人には理解できない異界の言葉、竜語でタイダルに話しかけるブラスト。

人語を話せることを大勢の前で明かすわけにもいかないので、こう
いう措置を取った。

『いや……だがあいつの気配は感じるな』

『わかるのか！？』

『漠然と……だがな』

タイダルも多少は感じていたらしい。

警戒はしていたが会うことはなかったということだろう。

『それにしてもよくお前が気付いたな？』

『シヨウだ……つか俺が鈍いとも言いたいのか？』

『そうか。それがあの少年の力か……』

『……無視するな』

ブラストの抗議もそっちのけで、パートナーであるアオイのほうを
見るタイダル。

「負けないよシヨウ！」

「あはは……うん！」

そのアオイはというとほのぼのとシヨウに宣戦布告。
シヨウは苦笑しながらそれに答えた。

『多分決勝で戦うことになるだろうな』

『だが手加減はしないぞ？』

『当然だ』

例えブラストではなく、タイダルが光の力を手に入れていたとして
も、同じことを言っただろう。

二人は互いに認めた好敵手^{ライバル}。

この戦いの先に自分達の目的があるうと手を抜くことは許されない。相手の自分に対する思いを汚すことに繋がるのだから。

だからこそ全力を尽くす。

自分の思い、意志を相手に伝えるために。

「参りましょう！ 疾風の大会荒らし！ ブラスト&ショウ対青の閃光！ タイダル&アオイ」

既に刀を出しているブラストと雷の翼竜人形態をとっているタイダル。

二体の竜は互いに笑っていた。

「試合開始！」

その合図とともに同時に勢いよく踏み込んだ。

雷鳴轟く大海

刀を振るうブラスト。

その強力な斬撃をタイダルは水で作った盾により巧みに回避している。

あるときは水の流れを制御して刀の軌道を受け流す。

またあるときは水を大量に使役して壁とし、視界を遮って回避する。そして隙があれば水流を放出して攻撃をする。

その巧みな戦い方にブラストは完全に近接攻撃を封じられていた。

『くっ』

一撃も与えられていない事実にただ焦るだけのブラスト。

『こないのか？ ……ならこちらからいくぞ！』

次の瞬間雷の形態になり、先ほどとは一転して攻勢に出るタイダル。空へと飛んで距離を測ろうとするもデュークのととは違い、タイダルは翼を持つのでそう簡単にもいかない。

雷で構成された槍を使って近接攻撃を仕掛けてくる。

その槍を思創によって盾を作り出し、なんとか矛先を逸らすブラスト。

大きさこそ違いはあるものの、人が作り出した武器を竜が使う姿は異様な光景だった。

『ほう……なかなか面白いものを持っているな』

盾が槍の勢いに耐え切れず散った後、すぐにまた同じ盾が現れた光景に多少驚いたタイダルが聞いた。

『思ったものの形状をそのまま存在させるらしい。ある出会いで受け取ったのだが今では俺の相棒だ』

打ち合いながらもそう真っ直ぐに言うブラストに驚きを隠せないタイダル。

獣界にいたころはどこか一匹狼の感じがあり、タイダルに戦いを挑んできていた。

そんな彼が相棒という言葉を口にしたのだ。

驚くのも無理はない。

自身の想像以上の出来事があったのだろう。

ブラストの成長を嬉しく思うタイダルではあったが今この状況、準決勝という舞台に関しては別。

『お前に新たな力が手に入ったように俺も新たな力を得た』

タイダルはアオイに目配せをする。

アオイはそれに頷いて言葉を唱え始めた。

「天より降りし雨、生きるものすべての恵みの水」

それは問いかけるようでもあり歌っているようにも思えた。

「その水、集まるは大きく広がる海の一部」

タイダルの周囲に水が集まり始める。

それはブラストが風の覚醒をしたときと同じようにも見えた。

「しかし天から降り注ぐのは恵みだけにあらず」

だがそこからは違った。

「あるときは災いとなりて神の裁きが舞い降りる」

タイダル周囲の水が震え始めた。

「その名は雷、絶対無比のその裁きの前に立ち上がることも至難なり」

水は帯電し、溶け合ってタイダルを包む。

「今ここに姿を現せ」

そしてアオイの言葉が終わる。

「雷鳴轟く大海の竜、タイダル!!」

その瞬間、タイダルを包んでいた水が弾け飛んだ。

——圧倒

今のタイダルを表す一言にこれ以上相応しいものはない。

姿こそ雷の覚醒状態と同じ翼竜人タイプであったが、見た目だけで畏怖を感じる。

右手には雷の槍、左手に水の盾を持ちその光景は空を飛ぶ戦士。

同じ二属性のプラストの通常形態とは、比べ物にならないくらい力を持つことが容易に想像できる。

『これが……』

「私とタイダル最高の力」

それはタイダルとアオイが辿り着いた最強の姿。

「『アルティメットモード』」

『……いくぞ』

ブラストがタイダルのその合図に反応しようとしたとき、既に目の前にいた。

そのスピードはデュークのライティングモードに匹敵、もしくはそれ以上。

『っ！?』

ブラストは反射的に刀を振るうが、気の乗っていないその攻撃をタイダルが喰らうはずもない。

水の盾で軽くなされた。

雷の槍が突かれ、身をよじて回避。

体勢を立て直そうとするも、既にタイダルは次の攻撃に移っていき

まったく隙がない。

加えて紙一重で回避できるギリギリのタイミングで突きを放つてくる。

まるでいつでも止めを刺せる……そう言わんばかりに……。

「盛り上がってまいりました神竜杯準決勝！ タイダル選手の猛攻にブラスト選手は防戦一方！ この状況を覆せるのか！？」

数分ののち、ブラストは完全に劣勢に立っていた。

身体には回避しきれなかった刃傷がいくつもつき、体力も極限まで減少。

攻撃できたとしてもあと一撃だろう。

対してタイダルは悠然と立ち、まだまだ余裕といったところ。絶望的な状況だった。

『この程度ならブレイズには到底勝てんぞ』

その言葉にブラストは何も返さない。

『……これで終わらせてやる』

タイダルが持っていた雷の槍と水の盾が消え、新たに武器が現れる。武器の名はグングニル。

神が所有する投槍で貫くものという名のとおりそのスピード、パワーともに雷の如し。

本来ならタイダルが持つ代物ではないが雷の槍、水の盾と同様アルティメットモードの力で構築したもの。
贗作ではあるがその力は本物に引けを取らない。

『いくぞ！』

その声とともにグングニルはタイダルの手から放たれた。

時は少し遡りブラスト。

雷の槍による隙のない突きから回避する中、策を考えていた。
しかしタイダルがグングニルを取り出したとき打てる手はただ一つとなった。

体力も残り少なくタイダルは投槍による攻撃。

抜刀術である閃風はタイダル自身が接近しない以上使えない。

そのただ一つの策も、当たる当たらない以前に成功する確率すら低い。

だがブラストはそれにかけることにした。

『いくぞ!』

グングニルがタイダルの手から放たれる。
やるとしたら今!

(成功してくれ!!)

一瞬の交錯。

——想いは……形に……——

その場が静寂に包まれる。

タイダルが放ったグングニルはブラストの目の前まで迫っていた。
絶対回避不可能な距離。

しかしそこで光がブラストを包んだ。

その光から放たれるように一匹の蛇竜がタイダルのスピードの上を
いき背後に回る。

そしてその蛇竜の姿が変わりブラストの風の覚醒状態に。
そして思創で刀を構成し突き付けた。

この間…… 0.0何秒というたった一瞬の出来事だった。

『それが…… お前の答えか？』

『いや…… まだ中間点だ』

タイダルが聞き、ブラストがそれに答える。

その答えだけ聞くとタイダルはアオイに目で合図をした。

「？ いいの？」

アオイは不思議そうに聞くがタイダルが頷くと宣言した。

「それじゃ降参しまゝす」

「え、えゝと……」

司会が混乱するのも無理はない。

観客はもちろんのことショウやブラストまで驚いているのだから。

「だから降参だつてば」

「い、いいんですね？」

司会からの再三の問い。

「うんっ」

それにアオイは頷いた。

「え〜と……アオイ選手の降参によりブラスト選手、決勝進出〜！」

大混乱の準決勝がこれで終了した。

「何故……」

「……元々優勝する気はなかった」

タイダルの中から理由が語られる。

「我がこの大会に参加した目的はブラスト、お前がどこまで成長し

たかだ。我らの力はパートナーとの絆によって成長する』
『何……？』

ブラストの覚醒はブラスト自身とシヨウの心境の変化によって発動していた。

一度目はダイルの火球からシヨウを守ろうとしたブラスト。

風の覚醒は覚醒したダイルの力に諦めたブラストを守ろうとするシヨウ。

そして光の覚醒はシヨウが神奈を助けようとしたあの時。

『見た限りだとかかなり絆を深めていたようだな。まだまだ俺には勝てないがな』

『まさか……』

何かに気付いているようなタイダルの物言い。
ブラストが確認しようとしたそのとき……。

「グオオオオオ！！」

闘技場上空に一体の漆黒の竜、ブレイズ。
その背にいるオスカが口を開いた。

「さあ……地獄の始まりだ」

黒き炎がブレイズの周囲に現れた。

雷鳴轟く大海（後書き）

タイダル（アルティメット）

アオイのパートナーであるタイダルの最終形態。

二つの属性を持つ竜が、その二つを同時に覚醒させ、パートナーと心を合わせた姿、アルティメット。

タイダルのアルティメットの固有名称は『雷鳴轟く大海』。

雷で構成した槍と水流の盾を巧みに操る。

イメージは遊戯王の『ドラグニティ・フアランクス』

混沌

「オス力選手！？ 決勝はまだですよ！！ このままだと失格に…」

「別にいいよ」

司会の忠告を軽く受け流すオス力。

その表情は底冷えするような笑みだった。

「俺の目的は……」

右手をゆっくりと上げ始める。

何かの合図のように……。

そして……。

「この世界を破壊しつくすことなのだから！！」

上げた右手を振り下ろすのを合図に、黒き炎が無造作に降り注いだ。

観客を守るための一種のバリアに、その炎が当たったことでそれは起きた……。

妙な音が鳴ったのである。

「……えっ……!?」

観客が一斉に驚いた。

コロシウムを覆う膜のようなものが消え去ったのだ。

それを証明するかのように観客席の後ろにある外壁に炎が当たった。その威力に外壁の一部が崩れ、破片が観客席に飛び散る。

突然の事態で観客は対応できずにいた。

『サンダーストーム!』

タイダルの放った雷の暴風が、観客に向かって降り注いでいた破片を跡形もなく消し去った。

だがそれで観客は確信した。

カオスのいったことは本当だと。

「……うわぁー!?!」

コロシウムは大混乱。

人々は波を掻き分け我先に出口へと向かった。

その間も曝される黒き炎の嵐。

『アクアスプレット!』

『エア……ブラスト!』

避難する観客に当たらないように、ブラストとタイダルが消し去っ

ていく。

しかし明らかにブラストの勢いが少なかった。

「ブラスト！！ 一旦引け！！」

無理をして炎を消していくブラストにタイダルが叱責する。

既に観客は逃げるのに精一杯のため気づかれる心配は少なく、普通の言葉で。

「だが……」

「どちらにせよあいつを倒すのにはお前の力が必要だ！ アオイに治してもらわないとその傷ではどうしようもないだろ！！」

「ブラスト、タイダルの言うとおりだよ！ 一旦引こう！」

「くっ……」

タイダルに続きショウにも言われた事が堪えたようである。

悔しそうにしながらも控え室のほうに下がっていく。

「タイダル……」

心配そうにタイダルを見るアオイ。

「大丈夫だ。お前は早くブラストの傷を」

「でも……うん」

納得はしていないようだが、アオイはブラストの傷を治しに下がった。

「さて……ブレイズ」

タイダルが話しかけるが返ってくるのは雄たけびのみ。

「理性が……ないのか？」

答えは巨大な炎球だった。

「早く……早く……っ」

ブラストを治療しているアオイは焦っていた。

だがショウとブラストはなぜそんなに焦っているのかわからない。

「アオイ……なんでそんなに急いでいるの？」

「タイダルなら倒せなくても抑えているくらいなら……」

「ダメなんだよ……」

アオイの悲鳴にも似た叫び。

確かにアルティメットモード、雷鳴の大海状態のタイダルなら万が一にも負けることはない。

だが……。

「アルティメットモードは絆の力！ 私が離れたら長くは持たないんだよ……」

「……！！？」

タイダルは苦戦していた。

ただブレイズに攻撃を与えるだけなら、そこまで厳しいものではない。

だがブラストが治療中である以上、コロシウムに被害を起こすわけにはいかなかった。

アオイの力はこの世界でも異質。

そのため人目に曝すわけにもいかず、控え室での治療になった。

生き埋めにならないように、コロシウムに被害を出すわけにもいかない。

必然的に守りながらの攻撃になり、ブレイズが無造作に放つため攻勢に出られずにいた。

「……予想以上にきついな」

さすがのタイダルも疲労の色は隠せない。

長時間一体でほとんどの攻撃を防ぎきっているのだ。

それに加えてブレイズに攻撃を与えて、少しでもダメージを与えておかなければならない。

いくら実力のあるタイダルも限度があった。

そして……。

「……………なっ!？」

突然タイダルの姿が雷の覚醒状態に戻った。

つまり……………時間切れ。

その瞬間を狙ったかのように、炎球がタイダルを襲った。

「ぐっ……………くそ……………」

対応しきれずに攻撃を受けるタイダル。

あまりのダメージに倒れ伏した。

「これで終わりだ」

ブレイズの背に乗るオスカがそう言うと、ブレイズの姿をした影が大量に現れる。

以前ブラストが戦ったときに使われた技、シャドウイリジョン。

そしてあの時と同じように、すべての影が黒き炎球を放った。

タイダルも迎撃するが数が多すぎる。

そしてついに1つの炎球がタイダルの迎撃を抜けた……………。

「タイダル!!」

そんな危機に現れたのはなんとショウだった。

その手には自らの武器、歌翼。

シヨウはその歌翼で、タイダルに迫っていた炎球に向かって……。

「はぁ!!」

真つ二つに切り裂いた。

そのあまりの出来事に全員の注目がシヨウに向く。

それは理性を失っているはずのブレイズも同じだった。

それがシヨウの狙いだった。

「ブラスト！ 今だ!!」

突如、どこからともなく白き光線がブレイズに向かって放たれた。

反応仕切れなかったブレイズは体制を崩す。

そして光線が放たれた方向から、一匹の二枚の翼を持った蛇竜が現れる。

その蛇竜を中心に世界が広がる。

白き、光の世界。

『白明の世界』
はぐめいのせかい

蛇竜が口を開く。

「さあ……」

それは確かにブラストの声。

光の覚醒を果たしたブラストであった。

「反撃……」

シヨウが続きを紡ぐ。
そして……。

「「開始だ!!」」

天が微笑むのは……

そこはもうひとつの世界だった。

ひとつの世界に二つの世界がある矛盾。

しかしそれこそがブラストの本来の力。

その空間はブラストの世界。

「……傷が？」

タイダルがブレイズ受けた傷が消えていく。

「ガアアア！！」

ブレイズの咆哮。

炎球を作り出し攻撃をしようとした。

だが……。

「テラノス・レイ」

どこからともなく光の弾丸が現れてブレイズを強襲。

その衝撃に攻撃を中断して当たった方向を向く。

直後に後ろからの攻撃。

さらに光の弾丸による攻撃が続きその方向性がまったくない。

全方向、どこからでもくる攻撃。

空間内すべてが弾丸の発射台。

ブレイズは少しずつ、確実にダメージを蓄積させていった。

まずいと思ったのか光の空間から外に出ようとするブレイズ。

しかしその方向に現れた光景は……・

「!?!」

光の弾丸による弾幕。

それが壁が迫るように一斉発射された。

避ける隙間もなく全身に弾丸を受けるブレイズ。

そしてついにその巨体を地面につけた。

「とどめだ」

光明の世界が消える。

この空間はテラノス・レイなど一部の力しか使えない。

だからとどめを刺せる技を使うために光の空間を消した。

そして今の姿、光の力での最強を大技を放つ。

極大の光のレーザー！

「イノセントノヴァ!!!」

光の放流がブレイズを飲み込んだ。

「……やった？」

土煙があがってブレイズの姿は見えない。

だが確実にブラストのイノセントノヴァは直撃した。

ブラスト光覚醒の最強技、消滅していてもおかしくない。

しばらくすると土煙が晴れてきた。

ブレイズはまだ存在していた。

だが様子がおかしい。

この世界にいる幻獣が死ぬとき、跡形もなく消え去り、魂となって幻獣界で姿を変える。

だからこそブレイズが存在しているということは、死んではいないということだ。

だが……。

「っ！？」

タイダルの傍に来ていたアオイが吐きそうになっていた。
それもそのはず。

ブレイズの身体の肉が徐々に崩れ落ち始めていた。
腐り始めているようにも見える。

一部は骨が見えて生きているようには到底見えない。

だがそれでもブレイズは動いていた。

その姿は地獄より這い出る亡者の様。

「ゴオオオオオ……」

ブレイズの低い咆哮が響くとブレイズを中心に大地が姿を変える。
大地が割れ、草木は腐り始める。

コロシウムを形成する石も腐食して崩れ始めた。

「……勝てるの？」

アオイが弱気な言葉を呟いた。

そんな姿を上空から眺めているものがいた。

「さあ……これからだ」

その者は人でありながら何の支えもなく宙に浮いている。

「これで……この世界も終わりだな」

それだけ呟くとその者は姿を消した。

その者の名はオスカ。

この世界に生を受けた……ものではない者。

「勝つさ」

ブラストが決意を持って言う。

「この世界は絶対に壊させない」

シヨウも決意を持って言い放つ。

「俺たちの世界は」

そしてシヨウとブラスト、二人の意思が一つになったとき。

「僕たちが守る!!」

新たな力が目覚める!!

「何……だ？」

ブラストの頭にいくつかの言葉が浮かび上がる。

「風……光……？」

それはシヨウも同じだった。

そしてそれは力が生まれた証拠。

「シヨウ！ それ、トリガーワード!!」

トリガーワード。

それはアオイとタイダルがアルティメットモードに変わるときに言った言葉。

それは即ち、ブラストがアルティメットモードになれるということでもあった。

「ブラスト！」

「ああ！」

ブレイズを倒し世界を救う。

その思いがアルティメットモードを覚醒させた。

「ブラスト」

喜んでいるところにタイダルが声をかける。

「……ブレイズはどこかおかしい。開放させてやれ」
「……ああ」

そしてついに目を瞑ったショウの口から、トリガーワードが言い放たれる。

「大地に吹きつく風……天より輝く光……」

ブラスト自身が光り出す。

「時に風は怒りを剥き出すも優しく吹き付ける……」

そして風がブラストに纏わりつく。

「光はこの地に生を持つものすべての恵みとなりて……」

そして風は竜巻となってブラストを覆い隠し光はさらに増す。

「今、ここに空を支配する者が現れる」

シヨウはゆつくりと目を開ける。

自身の相棒のその姿を目に焼き付けるために。

「蒼天の覇者、ブラスト!!」

この世界の運命を決める竜、ブラストがその新たな姿を現した。

天が微笑むのは……（後書き）

ブレイズ（ゾンビ）

ブラストに倒されたはずのブレイズが、肉体を滅ぼしながらも動き続ける姿。

何故こんな姿になったのかは不明。
全てを腐食させる力を持っている。
既に理性はないようだ……。

イメージは遊戯王のドラゴンゾンビ。

風光の真竜

姿を現したブラスト。

まず目に付くのはその背にある6枚の翼。

鳥のような羽に覆われた翼でありながら力強さを感じ、神々しさもある。

身体は竜人形態でその手には思創がはめられていた。

「ゴオオオオ……」

すでにゾンビと化しているブレイズが動き出し、黒い瘴気を吐いた。瘴気はブレイズを中心として広がり、避ける余地もなくシヨウ達に襲い掛かる。

そこにブラストが降り立ち手を瘴気に向かって翳した。

「ホーリーアブソリユート」

光の結界がブレイズもろとも瘴気を押さえ込む。

瘴気はそのまま広がることはなく、結界の壁に当たるたびに浄化されて消え去っていく。

それでも瘴気は出続け、ブレイズがその結界を破ろうとする。

自身がその結界の力で傷つき、崩れ落ちながらも。

「……今楽にしてやる」

悲痛な顔を見せながらその手に剣を取る。

その剣はただ大きかった。

ブラストの身の丈を越え、天を貫くほどに。

想いを形にする思創がその想いに答えて創り出した巨大すぎるその

剣。

ブラストはその剣を持ち、未だもかくブレイズの頭上で構えた。
そしてただ振り下ろす。

「
■ ■ ■ ! !
」

それはブラストがこの剣、思創のこの形態に付けた名。

その一撃は大地を巻き込みブレイズを両断、その腐り切った身体を崩壊させた。

ただ巨大で、普通なら持ち上げることすら困難なほど大きな剣。
されどその剣に込められた想いはただ一つ。

クラリス
平和

「これで……終わったんだよね」
「ああ……」

破滅をもたらしたブレイズは消え去った。

しかしその争いの傷は残っている。

大地は割れ、草木は枯れ切っている。

これが元の姿に戻るのにはかなりの時間がかかるだろう。

「……俺に任せろ」

未だアルティメットモードを保っているブラストが声を上げた。

「ブラスト……それではお前が……」

「結局早いか遅いかの違いだ」

心配するタイダルにそう言うのと空高く飛び立ちその翼を広げた。

光がブラストの身体からあふれ出していく。

そして翼を一振り。

ブラストの身体からあふれ出していた光が粒子となって、ゴルドルクの大地に降り注ぐ。

「わあああ……」

「すごい……」

粒子が触れた大地は割れた場所が塞がり、草木は新たな生命を取り戻す。

コロシウムだけは元通りとはいかなかったが、これなら復興までそう時間はかからないだろう。

「……ブラスト!？」

ブラストの姿を見たショウは驚いた。

先ほどまで光で気づかなかったがブラストの身体が透けていたのだ。

まるでこの世界から消えるかのように……。

「……いいんだ。結局はこうしなければいけないんだ」

「で、でも……!!」

「本当にブレイズが幻獣界姿を変えているか確かめなければいけないしな。そしてブレイズに止めを刺せるのは俺だけだ」

使命があることはわかってても別れることには変わりがない。

ブラストとの早い別れに泣きそうになるシヨウ。

ブラストはそんなシヨウの頭に手を置いた。

「そんなに悲しむな。いつまでかかるかわからないが俺は必ず戻ってくる」

「……わかった。次に会うときは僕も強くなっているから」

シヨウは自分の刀、翼歌を抜いて宙へ掲げた。

「ああ」

ブラストは思創で刀を出し、翼歌に重ねてそれに答えた。それは彼らによる誓いの証。

「また……いつか会おう」

その言葉を残し、光を弾けさせてブラストはこの世界から姿を消した。

人々はそのブラストの姿を目にして名をつけた。

風と光の力を持つ真なる竜

風光の真竜と

あとがき

これにて『風光の真竜』本編は完結です。

あとクロスオーバー編1つと後日談1つが残っていますが。

この『風光の真竜』は自分、黒焰が始めて作った小説であり、色々
と粗が残っていたりします。

序盤のほうが短かったり、表現が乏しかったりですね。

表現はともかく、1話の長さは後半にいくほど長くなっていると思います。

さて、ブレイズの暴走の原因とか、オスカの正体とか謎は残っていますが、これは次の作品以降になっていきます。

それまで、しばしお待ちを……。

【クロスオーバー編】翼とAIRと海竜（前書き）

この話は『鎮魂歌』の後の神奈達sideの話となります。
クロスオーバー先のAIRの本編のネタバレも若干含んでいますの
でご注意を。

「クロスオーバー編」翼とAIRと海竜

神奈は光に包まれて柳也達の下へ降りてきた。

「神奈……」

「神奈様……」

「裏葉……柳也殿……」

3人は再びこうやって向かい合えたことを喜んだ。
だが……

「……翔は？」

神奈のその言葉に裏葉と柳也は辺りを見渡したが見つからない。
巨体であるはずのブラストの姿さえ。

「一体どこへ……」

「彼らは元の世界へ帰りました」

第三者の声。

驚いて声のしたほうを向くとそこにいたのは……。

「母上!？」

瀕死の重傷を負っていたはずの八百比丘尼だった。

「どうやらさきほどの竜の唄には癒しの効果もあったようです」

八百比丘尼の身体には傷跡一つ残っていない。

「そして……あの竜はブラストですね」

その言葉に3人は驚く。

あの神の化身とも思えた竜があのブラストだったとは……。

「それで翔君達は？」

「使命を果たしたからこそ元の世界に帰ったんでしょうね」

「まだお礼も言っていないのに……」

神奈は俯いていた。

自分のことを助けてくれたばかりか、母を治してくれた翔達にもう会えない……。

「……方法がありますよ」

「えっ……？」

神奈を含む3人が八百比丘尼のほうを向く。

「彼のいる世界は無理ですが……彼がこれから行くであろう世界へ飛ばすことはできます」

「それは本当か？母上！」

八百比丘尼の声に驚きと喜ぶ声をあげる神奈。

「ええ、あなた達3人を彼らがいくだろう世界に飛ばします」

「さん……にん？」

「ええ、わらわの力でも3人が限界です」

少し寂しそうな顔をしながらもそういう八百比丘尼。

「せっかく母上に会えたのにまた別れるなんて……」
「神奈は……あの翔という者が好きなのでしょう？」

それでも嬉しそうに、ちよつと意地悪に聞く八百比丘尼。

「なっ……！？何を申すか母上！！」

真っ赤になって反論する神奈。
それを見て笑う柳也と裏葉。

「な、何を笑うか！！柳也！裏葉！」

「くすくすっ」

「母上まで！！」

全員に笑われて真っ赤になって怒る神奈。

「……あの唄で翼人の呪いも解けました。怨みを持つ者もいなくなりましたしこの世界で危惧するものはありません」

「だが……！！」

「わらわは……母です」

柳也の反論を制し、八百比丘尼が言葉を口にする。

「母が子の幸せを願うのは当然のことでしょう？」

その顔は笑顔に包まれていた。

何年も……することのなかった表情。

「母上……」

「それに言ったでしょ……自分のやりたいことをしなさいって……」
「……うぬ!!」

神奈は笑顔で頷いた。

「裏葉殿、柳也殿。神奈をお願いしますね」

「はい」

「心得ました」

八百比丘尼の言葉に頷く二人。

「では、いきます……」

「母上……いってきます」

八百比丘尼は少し驚きながらも笑い返した。

「……いつてらっしゃい」

こうして神奈達は世界を超えた。
いつか現れる翔を待つために……。

「もう一度だけ頑張ろうと思った夏休み……往人さんと出会ったあの日から始まった夏休み……」

一人の少女がよろめく脚で懸命に歩く。
その先にいる女性は泣いていた。
叫んでいた。

今起こっている出来事を信じたくないがために。

「いろんなことがあったけど、辛かったり苦しかったりしたけど……私、頑張ってたよかった」

少女の命は残り乏しい。
ないはずの翼に蝕まれながらも懸命に歩く。
その意思を……母親に伝えたいがために。

「私のゴールは幸せと一緒にだったから。一人きりじゃなかったから」

一步一步、着実に母親に近づく。

そして……残りわずか。

「だから……だからね、もうゴールするね」

「あかんっ！ あかんゆうとるやろー!!」

その言葉も空しく、少女は母親に近づき……

「ゴールッ……」

「させてたまるか」

突如現れた男に阻まれた。

「えっ……！？」

「なっ……なっ……！？」

二人は驚いた。

なぜ……なんで……この人がここにいるのか？

「なんでここにいるんや！！ 居候！！」

それは数日前まで少女、観鈴と一緒にいた国崎往人本人だった。

「んなもんは後回しだ」

「なっ！？」

こんなときに何をと観鈴の母親である晴子が言おうとしたとき。

「観鈴。まだ翼は痛むか？」

「……は？」

往人の言葉に呆然とした晴子は観鈴の言葉に驚愕することになる。

「あれ……？ 痛くない」

観鈴は何度も確かめるが先ほど往人が来る前に感じていたあるはずのない翼の痛みは消えていた。

「ホ、ホントか観鈴！？」

「う、うん」

晴子の問いになぜ痛みが引いたのか疑問に思いながらも頷く観鈴。

「よ、よかったー！！」

「お、お母さん！？」

突然抱きついた晴子に驚くものの、しばらくすると二人で喜び合った。

ここに長く続いた翼人の呪いが終結した。

「よかったな。観鈴」

抱き合って喜ぶ二人の姿を往人は見守っていた。

「それじゃあ往人さんは今までどこにいたの？」

晴子が少し落ち着いた頃、観鈴が往人に聞いた。

「ああ、まあいろいろとあつてな」

どこから話したのかと考えていたそのとき……

「な、なんや!？」

空が光った。

光は3つの塊に収束し、地上へと降りてくる。

往人と晴子は警戒して身構えた。

やがて地面に降り立つと光は弾けて何かが現れた。

「……」

「どうやら未来……のようですが」

武士らしき人物と着物を着た女性、そして……

「そなた……」

観鈴を見つめる翼の生えた少女がいた。

「神奈！ 翼が！！」

「かん……な？」

武士の言葉を聞いた往人は驚きの表情を浮かべる。

そのことについて聞こうとしたそのとき炸裂音が鳴り響いた。

その場にいた全員が音のした砂浜のほうを向くと……。

「イタタタタ……ここは？」

青い髪の少女がいた。

そして……

「大丈夫か？ アオイ」

海に巨体を沈める竜の姿があった。

——現代と過去、そして時空を越えたこのとき——

——物語はまだ終わらない——

t o b e c o n t i n u e ? (前 書 き)

今回でラストです。

次回作をお楽しみに。

t o b e c o n t i n u e ?

「ふっ……はっ……」

シヨウとブラストの別れから2年の月日が経った。

あの時以来、シヨウはモンスターハンターとしての活動はしていない。

いつ来るのかも分からないブラストを待っているのだ。

それこそ何十年かかってても。

そして再び出会うときに驚かせるために、翼歌を振るい続けているのである。

そしてそれは、確実に実を結んでいた。

「はっ！！」

気合一閃。

その一振りで、その先にあつた木に傷を付けたのだ。

威力こそ比べるまでもないが、シヨウは自身の力だけで、ブラストのエアスラッシュを模写したのである。

絶え間ない努力のおかげだった。

「シヨウ？ またこんなところにいた」

そこへシヨウへと声をかける一人と一匹。

アオイとタイダルである。

あの別れからシヨウとアオイ達は行動を共にしていた。

始めこそ、ブラストがいなくなったことによるタイダルの護衛だったが、一緒に暮らしているうちに、アオイがシヨウに対して好意を

持ち始めたことも理由の一つ。

最もシヨウはまったく気付いていないのだが。

「アオイ？」

「アオイ？　じゃないよ。そろそろいくよ」

「わかった。すぐいくよ」

相変わらずアオイとタイダルは幾多の大会に勝利し続けている。

この日もその会場へと向かう途中であった。

「そういえばその石、いつも首にかけてるよね？　何か思い入れでもあるの？」

アオイがそんな質問をしたのはその道中の最中であつた。

「これ？」

シヨウはその石を手にとって、少し持ち上げた。それはかつて、異世界の青年コウヘイから貰い、別の世界へといくきっかけとなった石である。

「幻獣界でもみたことがないな。どういった経緯で手に入れたんだ？」

今現在、雷覚醒状態のタイダルもそう言ってシヨウに聞く。

「うーん……アオイとタイダルになら別にいいかな」

そうしてシヨウは話し出した。

石によって導かれた別の世界。

新しい出会いと別れ。

自身が誓ったその決意まで……。

「そんなことがあったんだ……」

「別の世界……か」

さすがにそこまでの事情が絡んでいるとは思いつかなかったアオイとタイダルは、ただただ驚愕する。

「でもこんな石がねえ。もしかして願ったらいけたりして？」

「あはは……そんな簡単に」

その瞬間、石が光り輝く。

シヨウが異世界へといくことになったあの時と同じように。

「えっ!？」

「ぬっ!？」

「ま、まさか!？」

光はアオイとタイダル、そしてシヨウを包み込み、収束していく。
その光が消え去った後、その場には誰の姿もなかった。

この日、シヨウとアオイとタイダルはこの世界から完全に消えたのだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5386o/>

風光の真竜

2010年11月5日22時40分発行